

リハビリテーション・福祉分野  
青年海外協力隊巡回指導調査団  
調査報告書  
(コスタ・リカ共和国、メキシコ合衆国)

JICA LIBRARY



J1166587[4]

平成 13 年 9 月

国際協力事業団  
青年海外協力隊事務局

青海 2

JR

01-11

**リハビリテーション・福祉分野  
青年海外協力隊巡回指導調査団  
調査報告書  
(コスタ・リカ共和国、メキシコ合衆国)**

平成13年9月

**国際協力事業団  
青年海外協力隊事務局**



1166587[4]

はじめに

青年海外協力隊は発足以来 36 年を迎え、隊員の派遣数は累計 24,000 人を超え、派遣国は 60 余国に及んでいます。

リハビリテーション・福祉分野への協力は、1976 年の作業療法士隊員派遣開始以来、25 年に渡り 540 名の隊員を派遣しています。同分野は、経済水準からは最貧国と比べると開発されている、いわゆる中進国でも、未だ多くの問題がみられる国が多いことから、今後、協力隊としても注目して取り組むべき分野と考えられています。

今般の調査対象国であるコスタ・リカは、1979 年に理学療法士が協力隊員として初めて派遣されて以来、22 年間に 21 名の上記分野関連隊員が派遣され、長年に渡り同分野の発展に取り組んでいる国です。一方、メキシコは、協力隊派遣の歴史こそ浅いものの、同分野を支援重点分野に据え、今後積極的な取り組みを開始しようとしている国です。この二カ国から、同分野における現状分析とともに、今後の協力隊派遣方針策定を行うための調査要請が出され、今般、リハビリテーション・福祉分野の巡回指導調査団を派遣しました。

本報告書は、上記調査団による調査結果をとりまとめたものですが、今後の隊員派遣方針策定の資料として、広く関係者に活用されることを期待しています。

この調査団を派遣するにあたり、ご協力いただいた国内外の関係各位に深甚なる謝意を表すとともに、今後とも格別のご支援をお願いする次第です。

2001 年 9 月  
国際協力事業団  
青年海外協力隊事務局  
事務局長 金子 洋三

## 目 次

はじめに

目次

写真

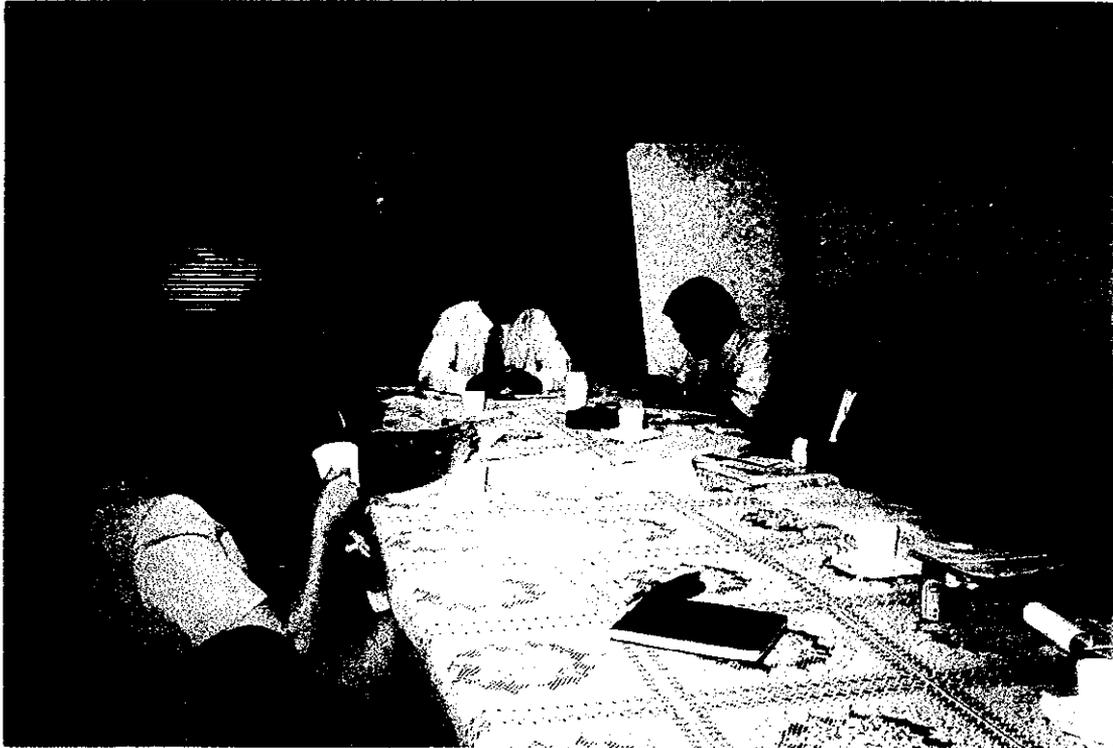
隊員配置図

第1章 調査団の概要	1
1-1 調査団派遣の経緯と目的	1
1-2 調査団の構成	3
1-3 調査日程	3
1-4 主要面談者	5
1-5 調査の方法	6
第2章 要約	7
第3章 コスタ・リカにおける調査	10
3-1 コスタ・リカにおける協力隊派遣概要	10
3-2 リハ・福祉分野隊員の活動状況	12
3-3 新規派遣要請の内容確認	17
3-4 リハ・福祉分野における問題点と課題	18
3-5 今後のリハ・福祉分野隊員派遣について	19
第4章 メキシコにおける調査	21
4-1 メキシコにおける協力隊派遣概要	21
4-2 リハ・福祉分野隊員の活動状況	23
4-3 リハ・福祉分野における問題点と課題	27
4-4 今後のリハ・福祉分野隊員派遣について	27
第5章 まとめ	29

別添

おわりに

(コスタ・リカ)



CR-1: コスタ・リカ企画省、国家リハビリテーション審議会、教育省特殊教育部門との協議



CR-2: リハ・福祉分野関連隊員との協議



CR-3:

大嶋みどり隊員（12/2 作業療法士）  
隊員の作業療法の結果右手が動くようになった子供



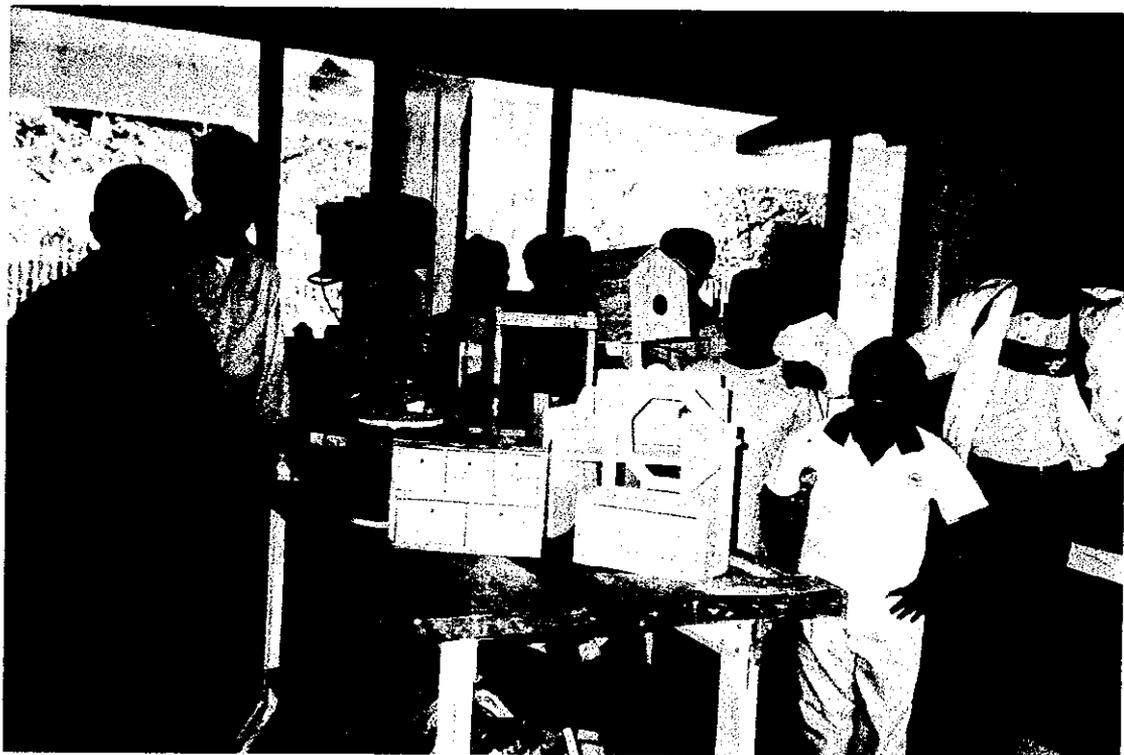
CR-4:

椿原よし美隊員（12/1 理学療法士）  
起き上がりの練習。誘導がうまい。



CR-5: 知的障害児達のリズム音楽。鏡に映っている。

(カルロス・ルイス・バジェ・マシス養護学校)

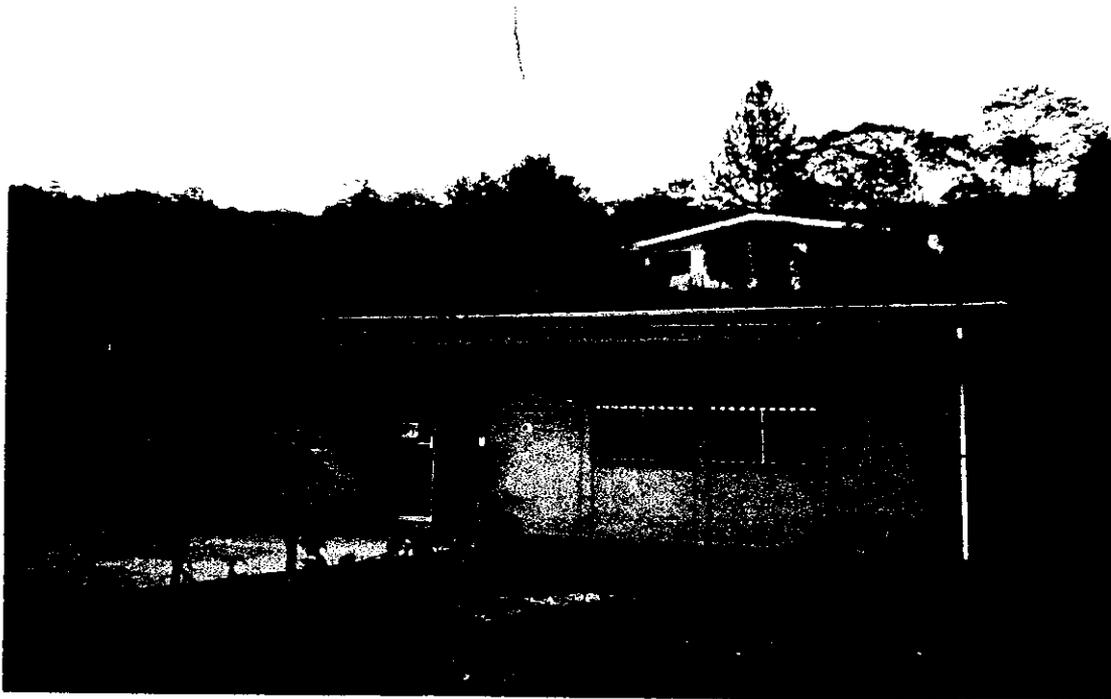


CR-6: 自分たちの木工作品を前に得意満面の知的障害児達

(カルロス・ルイス・バジェ・マシス養護学校)



CR-7: 羽入田さみ江隊員 (12/3・理学療法士)  
患者の腰痛を評価している。後方2人は実習生。



CR-8: 羽入田さみ江隊員が勤務する理学療法棟。協力隊員赴任に伴い新設された。

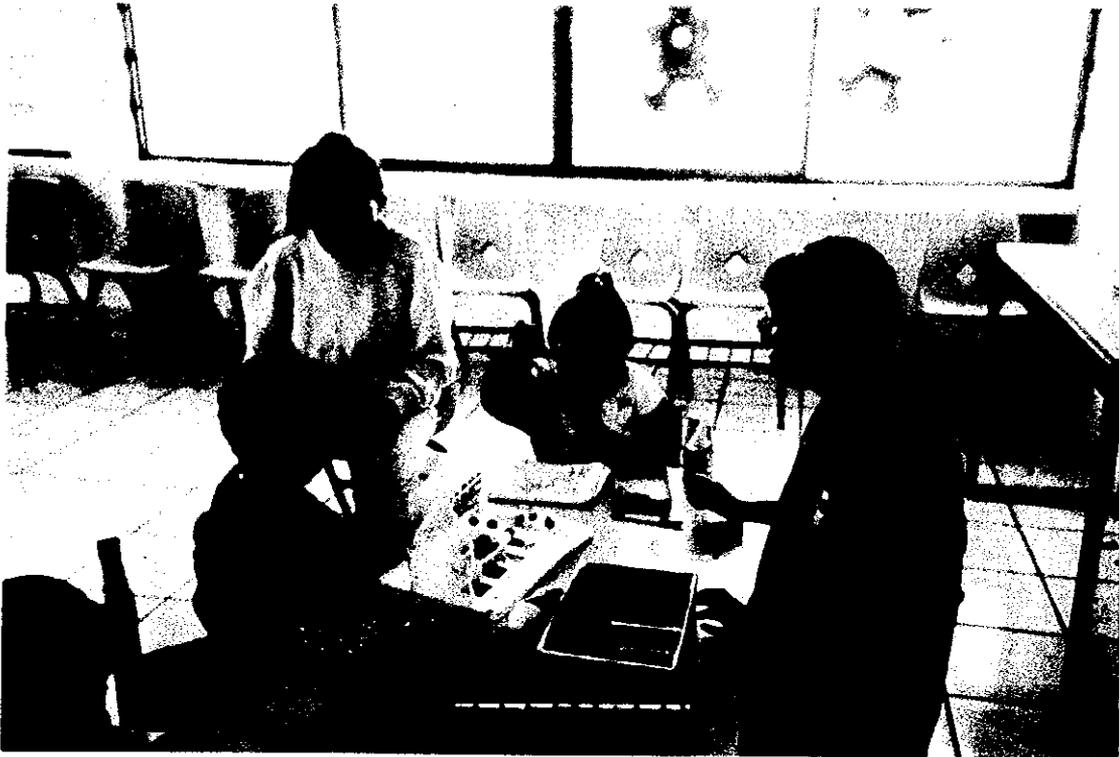
(メキシコ)



MX-1: 外務省における協議。左より田口技術顧問、国際科学技術協力課長、JOCV 担当官。



MX-2: 教育省における協議。左より仲間調整員、田口技術顧問、メキシコ総合教育初等教育総責任者、重複障害教育総責任者。



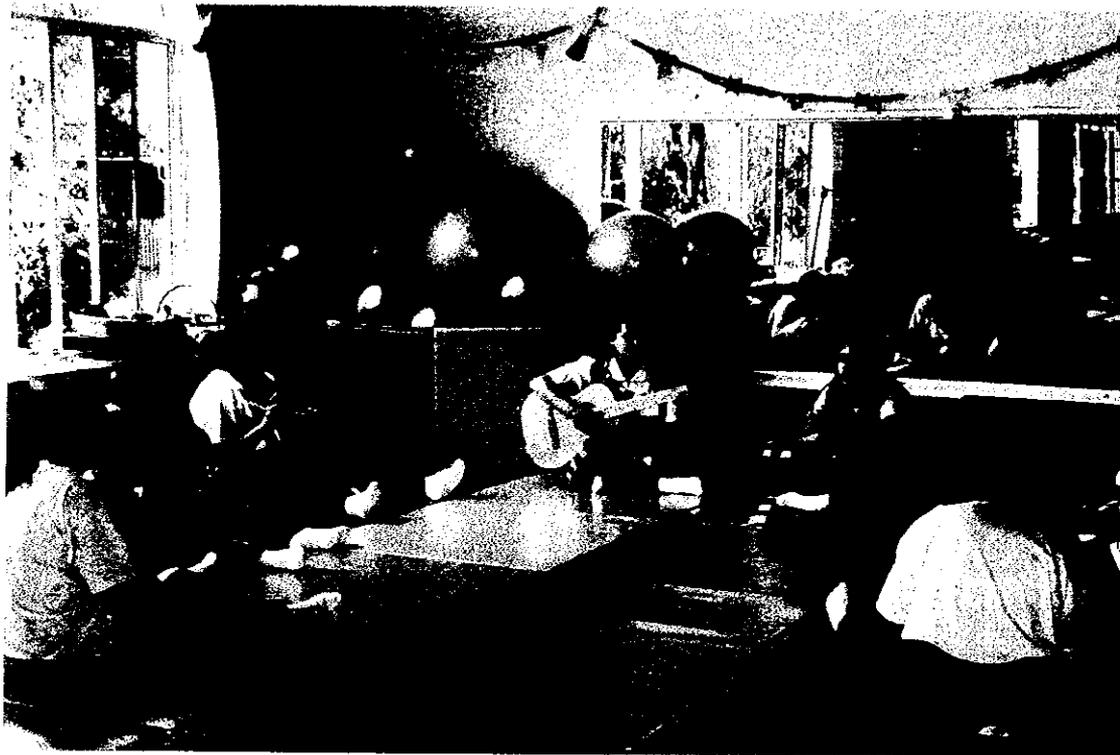
MX-3:

荻野民子隊員 (11/1・養護)  
(ウイチャパン総合教育センター)



MX-4:

ウイチャパン総合教育センターの  
母親は皆療育に熱心。

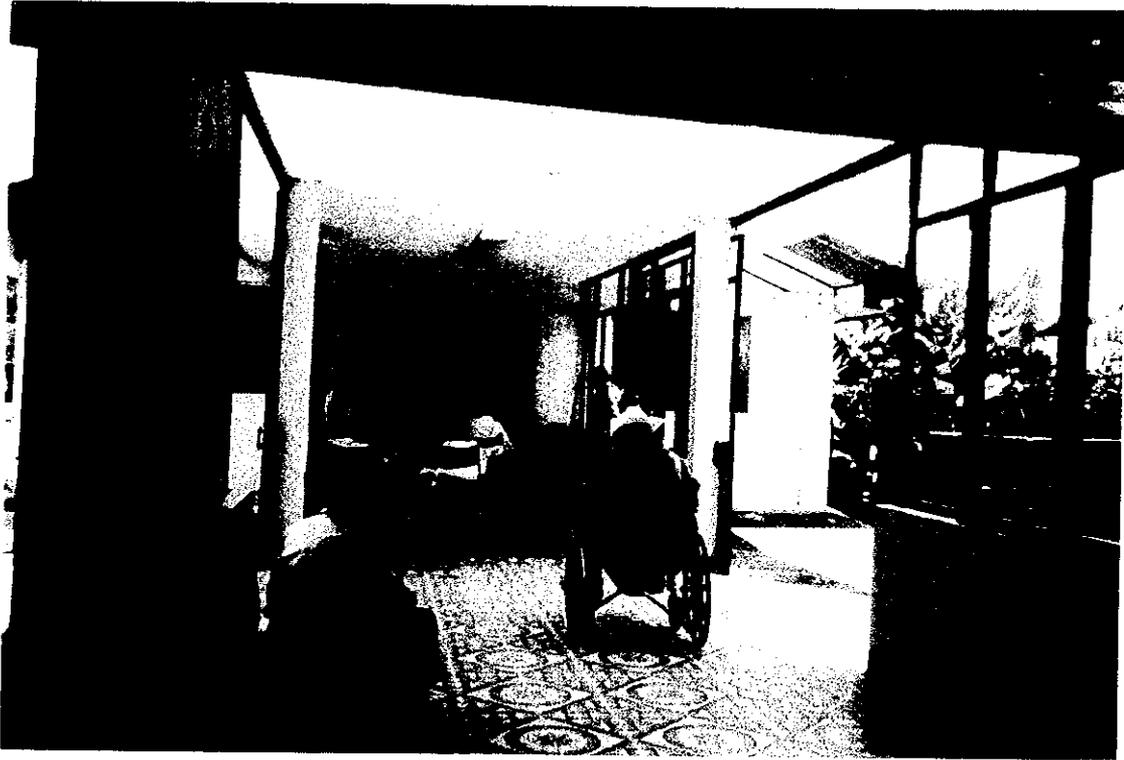


MX-5: 母親療育指導教室  
(脳性マヒ支援協会)

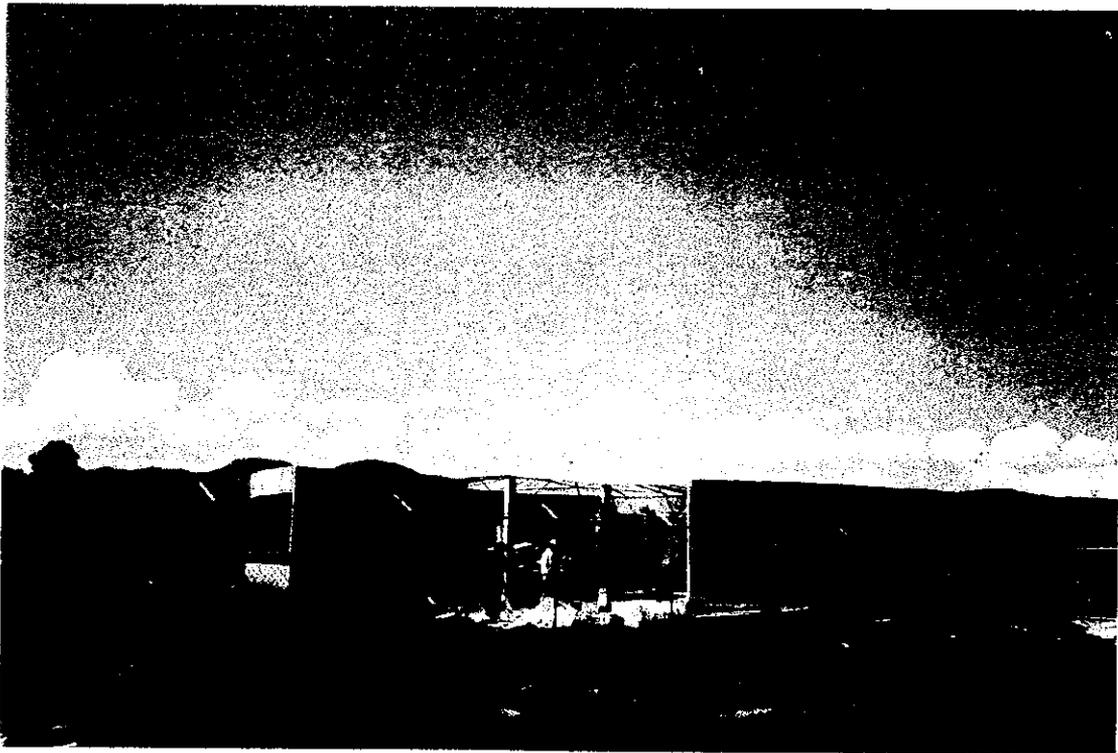


MX-6: ボールを使った運動が世界的に小児施設で導入されている。  
(脳性マヒ支援協会)

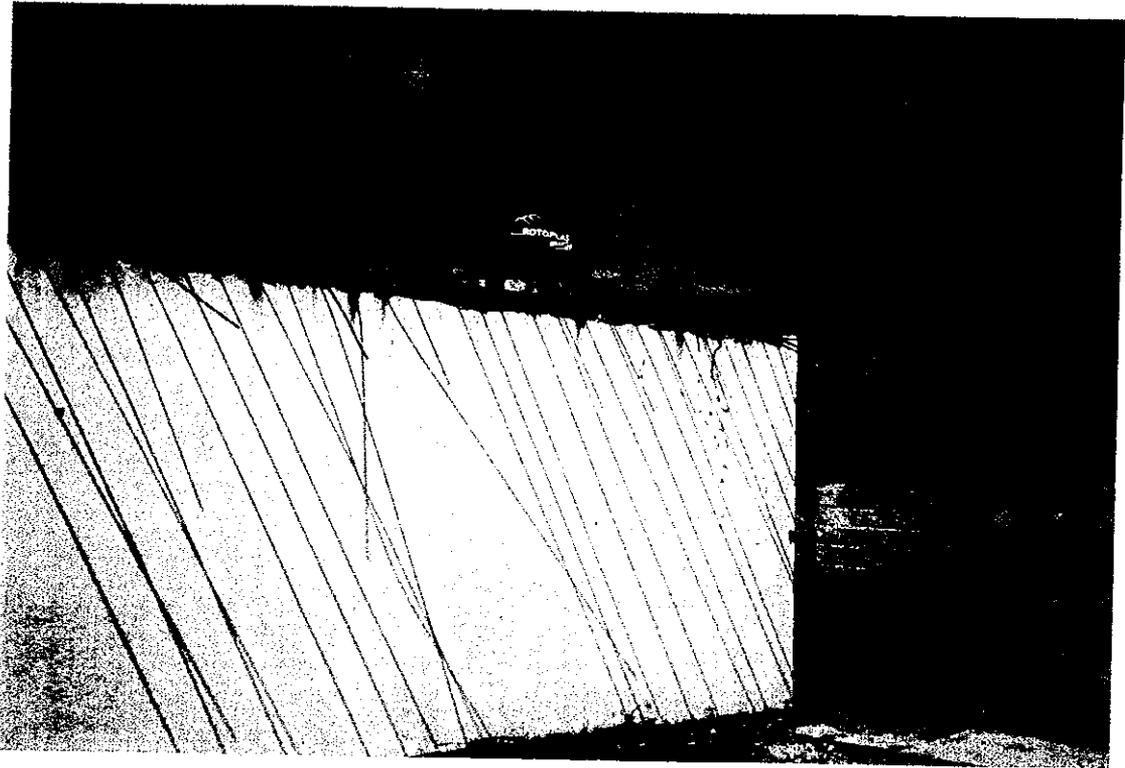
（日本の資金協力により建設された施設設備）



CR-9: コスタ・リカ、ロス・サントス老人ホームの渡り廊下（草の根無償資金協力）

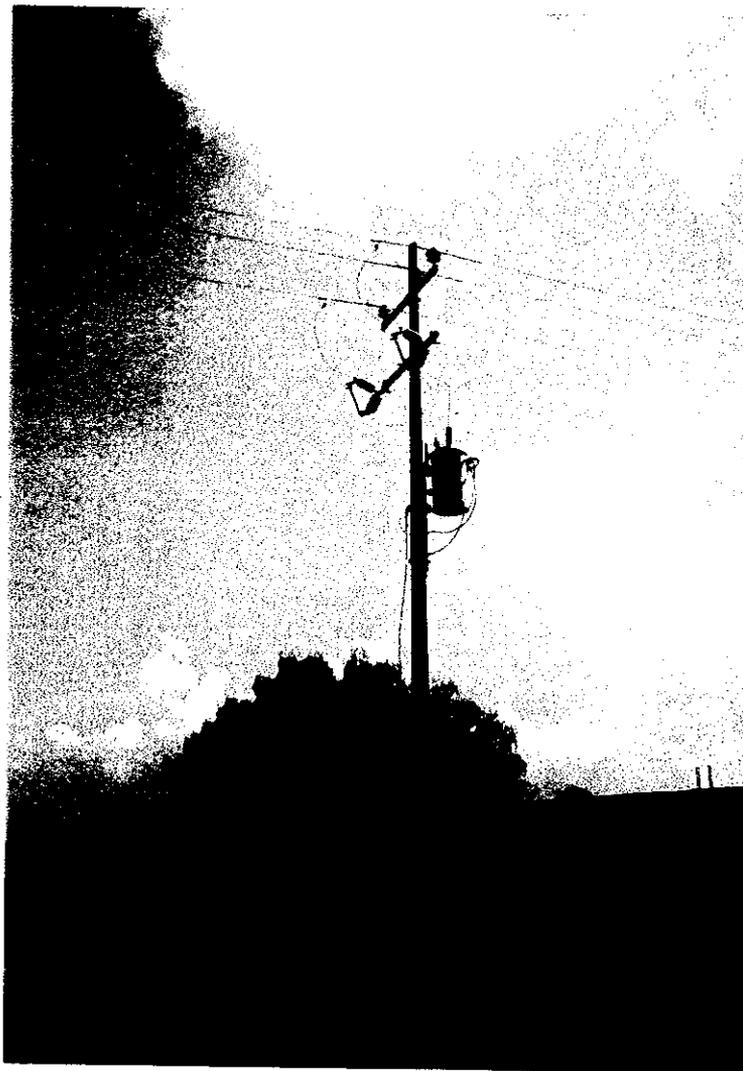


MX-7: メキシコ：神経開発専門センター。建築中の増設部門。（草の根無償資金協力）



MX-8:

ウイチャパン社会総合教育センター  
水洗トイレ用の貯水槽  
(草の根無償資金協力)

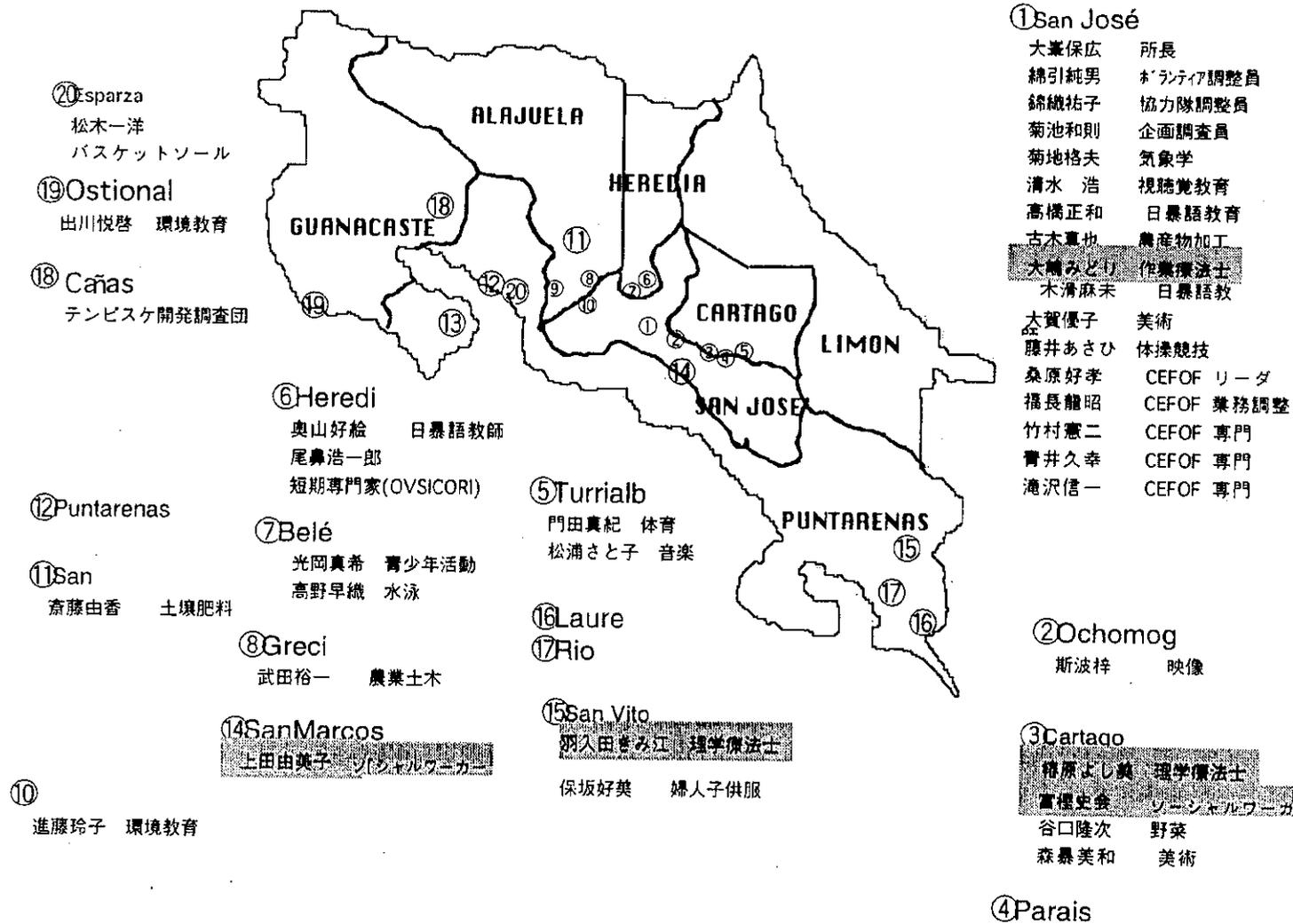


MX-9:

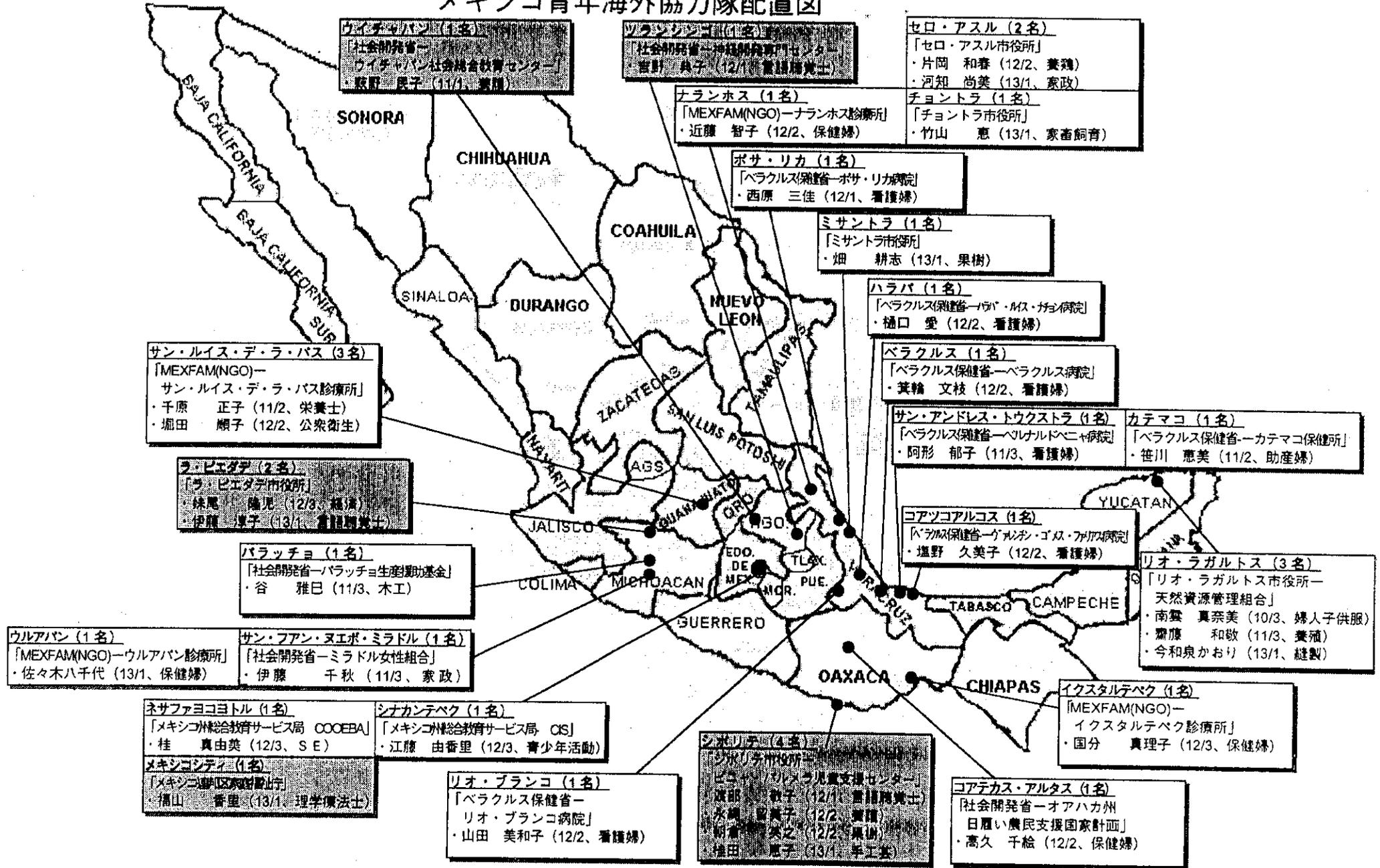
ウイチャパン社会総合教育センター  
電線 (小さなハートプロジェクト)

# コスタ・リカ青年海外協力隊隊員配置図

2001年10月5日現在



# メキシコ青年海外協力隊配置図



# 第1章 調査団の概要

## 1-1 調査団派遣の経緯と目的

### 1-1-1 概観

リハビリテーション・福祉分野（以下、リハ・福祉分野）は、青年海外協力隊の職種のうち、「理学療法士」「作業療法士」「養護」「義肢装具士」「鍼灸マッサージ師」「言語聴覚士」「ソーシャルワーカー」の7職種を指す。

リハ・福祉分野における協力隊員派遣は1976年に始まり、以来、25年間に渡り540名の隊員を派遣している。地域別に協力隊員の派遣実績をみると（表1参照）、中南米が最も多く、次いで、アジア、アフリカの順となっている。経済水準と隊員派遣要請の相関関係についてみると、そもそも、障害者支援という概念は、健常者に対するニーズが満たされて初めて取り上げられる問題ともいえる。途上国においては、健常者の生活改善が優先課題となっており、障害者支援まで目が向けられていない。一方、経済水準が改善されつつも、リハ・福祉分野での取り組みを手がけていない国、もしくは取り組みを始めたばかりの国もある。今般の調査対象国である、コスタ・リカ、並びに、メキシコは、中南米の中進国として位置付けられており、とりわけこの分野に強い関心を示している国でもある。

リハ・福祉分野に対する協力は、今後、経済水準からは援助卒業国とされている国に対する支援を考えるうえで、着目すべき重要な課題であり、協力隊としても独立した分野として取り上げていく必要があるだろう。

（表1）地域別協力隊員派遣数（1976年-2001年）

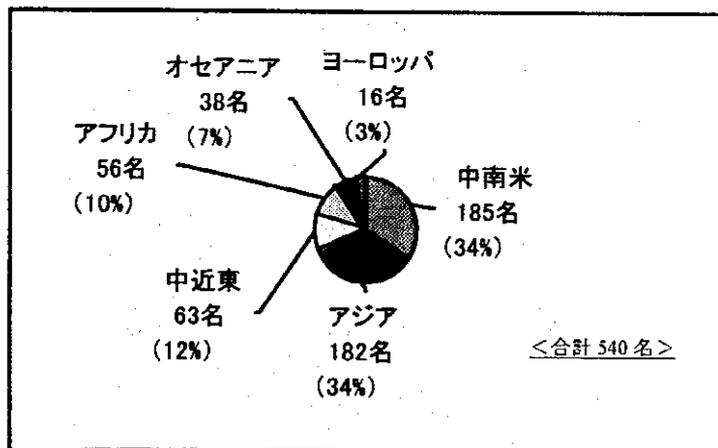


表2は、同分野に対する隊員派遣要請と要請の充足率を示したものである。途上国側からは、リハ・福祉分野に対し多くの協力隊派遣要請が出されているが、要望に見合う隊員確保が十分に出来ていない現状である。今般の調査対象国である、メキシコにおいても、平成13年度春募集にて関連要請8件が提出されたのにも関わらず、合格者は僅か1名であった。しかしながら、日本において、同分野関連の資格・技術を持つ者が減少しているわけではなく、むしろ増加している状況であるところ、今後、現地のニーズと日本側の社会状況に見合う隊員派遣を行うためには、どのような要請が有効か、今回の調査では併せて検討した。

(表2) 平成13年度春募集選考結果

	要請数	応募者数	合格者数	充足率
作業療法士	18	14	6	34%
理学療法士	20	15	5	25%
養護	23	39	14	61%
義肢装具士	6	1	1	16%
鍼灸マッサージ師	5	2	0	0
言語聴覚士	3	1	0	0
ソーシャルワーカー	4	46	2	50%

#### 1-1-2 コスタ・リカ

コスタ・リカに対する、リハ・福祉分野への協力隊員派遣は、1979年に協力隊としては初めて理学療法士が派遣されて以来、22年になる。コスタ・リカは、軍隊を持たないことから、国防予算が教育部門にあてられ、教育水準が充実した国である。コスタ・リカは、協力隊派遣開始以来、リハ・福祉分野を支援重点分野としてきた。協力隊派遣開始時は、国家リハビリテーション審議会等政府中央機関に対する隊員派遣が中心であったが、1997年以降、より地域のニーズに密着した養護学校や地方への派遣を行っている。現在、理学療法士、作業療法士、ソーシャルワーカー等同分野関連隊員5名が活動中である。過去に派遣されたリハ・福祉隊員21名の活動の軌跡を追い、併せて、今後の協力の方向性や効果的な派遣形態に対する提言を行った。

#### 1-1-3 メキシコ

メキシコでは、地域、貧困格差の是正を援助重点課題として全面に打ち出している。リハ・福祉分野では、とりわけメキシコ州、プエブラ州、オアハカ州、イダルゴ州にお

いて、膨らむ人口に対応し得る基盤整備計画はあるものの、人的資源に乏しく、障害児教育に必要な養護教諭、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などの不足は養護学校の運営の急務な課題となっている。

リハ・福祉分野隊員の派遣は平成11年度1次隊の養護隊員派遣を以て開始したところである。しかしながら、同国におけるリハ・福祉分野の要請は数多く、平成13年9月現在、養護隊員2名、言語聴覚士隊員3名、理学療法士隊員1名の計6名の隊員が同分野で活動しており、今後3名が派遣予定である。さらに、平成13年度秋募集では7件の要請が出されている。今般の調査では、派遣中隊員の活動及び配属先を調査・分析し、メキシコに対する我が方の援助方針と照らし併せたいうで、今後の効果的な派遣方針策定にあたっての提言を行った。

### 1-2 調査団の構成

団長 田口順子 青年海外協力隊事務局 技術顧問  
 企画調整 阪本真由美 青年海外協力隊事務局 海外第2課

### 1-3 調査日程

月日	時間	調査項目	備考
9月11日(火)	9:50	コスタ・リカ着 LR691 便	錦織調整員同行
	11:00	JICA/JOCV 事務所訪問	
	12:00	ホテルチェックイン	
	13:30	ホテル発	
	14:00	日本大使館表敬	
	15:00	企画省にて医療福祉関係機関との協議 (企画省/社会保障公庫/国家リハビリテーション審議会/教育省)	
16:30	ホテル着		
9月12日(水)	7:30	ホテル発	錦織調整員終日同行
	8:00	アンドレア・ヒメネス養護学校視察 (H13/3 隊で着任予定)	
	10:30	ロス・サントス老人ホーム (サン・マルコス) 上田由美子隊員活動視察	
	12:30	サン・ビトへ移動	
	19:00	サン・ビト着	
9月13日(木)		ホテル発	錦織調整員終日同行
	8:00	社会保障公庫サン・ビト病院	
	8:10	羽入田きみ江隊員活動視察	
	11:00	サン・ホセへ移動	
	18:00	サン・ホセ着	

9月14日(金)	8:15 8:30 10:30 14:00 15:30 18:00	ホテル発 脳性小児マヒ患者総合療育センター(グアダルーペ) 大嶋みどり隊員活動視察 カルロス・ルイス・バジェ・マシス養護学校(カルタゴ) 富樫史会隊員、椿原よし美隊員活動視察 国立サン・ファン・デ・ディオス病院要請背景調査 『義肢補装具作製』 医療福祉関係隊員との協議(事務所会議室) ホテル着	錦織調整員同行   綿引調整員、 マリーセグラ 職員同行
9月15日(土)	終日 4:30	JICA研修員との協議 (コスタ・リカ発 阪本団員グアテマラへLACSA7:50)	
9月16日(日)	5:00 7:00 14:30 16:00 16:10 18:30	ホテル発 コスタ・リカ発 田口団長MX386 メキシコ国際空港到着 ホテル着・チェックイン 事務打ち合わせ ホテル着	錦織調整員見 送り  仲間調整員出 迎え
9月17日(月)	9:00 9:30 11:30 15:30 16:30 18:00	ホテル出発・事務所へ移動 JICA事務所打合せ APAC本部視察(脳性マヒ支援協会) 在墨日本大使館表敬訪問 墨外務省国際科学技術協力課(IMEXCI)表敬訪問 ホテル着	仲間調整員同 行
9月18日(火)	8:00 10:00 11:30 14:30 18:30	ホテル出発 神経開発専門センター到着/隊員活動現場視察 イダルゴ州教育省管轄CAM第5号校視察 イダルゴ州教育省管轄CAM第1号校、2号校視察 ホテル着	仲間調整員、 山田書記官同 行
9月19日(水)	8:00 10:30 11:30 16:30 20:30	ホテル出発 メキシコ総合教育サービス局事務打合せ 各CAM視察 視察1:CAM第20号校視察 視察2:CAM第17号校視察 視察3:CREE(重複障害児リハビリ・センター) 視察4:CAM Valle Bravo 視察 メキシコ市へ移動 ホテル着	仲間調整員同 行
9月20日(木)	8:00 10:00 11:30 15:30 17:30 18:30	ホテル出発 ウイチャパン社会総合教育センター隊員活動現場視察 イダルゴ州DIFウイチャパン支所との情報交換 メキシコ市へ移動 事務所着/総括、報告 ホテル着・チェックイン	仲間調整員同 行
9月21日(金)	9:00	メキシコ発(JL012便)	

## 1-4 主要面談者

## (1) コスタ・リカ

所屬先	役職名	氏名
企画省	国際部門部長	Ejerico Porras
	協力部調整員	Mario Vindas
国家リハビリテーション審議会	長官	Barbara Holst
教育省	特殊教育部門 顧問	Lady Melendez
アンドレア・ヒメネス養護学校	校長	Alexandra Porras
	理学療法士	Susana Arias Duran
カルロス・ルイス・バジェ・マシス養護学校	校長	Rocio Fernandez
脳性小児麻痺患者総合療育センター	校長	Flora Bogantes
	JICA帰国研修生、理学療法士	Ana Kristina Temorio
社会保険公庫 サン・ファン・デ・ディオス病院	義肢装具士	Geovanny Alvarado Badilla
(NGO) ロス・サントス老人ホーム協会	施設長	Deyanira sanchez Retana
在コスタ・リカ日本大使館	特命全権大使	松井靖夫
	二等書記官	西山慎二
JICA コスタ・リカ駐在員事務所	所長	大塚保広
	調整員	錦織祐子
	調整員	楠引純男

## (2) メキシコ

所屬先	役職名	氏名
外務省	国際科学技術協力課 課長	Efrain del Angel Ramirez
	JOCV担当	Sunica A. Sanchiestevan
教育省 メキシコ総合教育サービス局	初等教育総責任者	Waldemar Molina Grajeda
	重複障害教育総責任者	Ana Jovita Regorreta Ozorio
重複障害児リハビリ・センター	校長	Hilda Maristela Flores Lopes
重複障害支援校	第5号校 校長	Silvia Amador Cruz
	第1号校、第2号校 校長	Luisa Cruz Enciso
	第17号校 校長	Virgina Mena Vargas
	第20号校 校長	Luz de Carmen Velasquez Martinez
	Valle Bravo校 校長	Gracia Corkidi Nacach
家庭福祉庁 イダルゴ州ウイチャパン支所	所長	Alicia Mendia de Pacheco
(NGO) 神経開発専門センター	身障者父母会後援会長	Joaquim Jesus Lira Garcia
(NGO) 脳性マヒ支援協会	医師	Enrique Garrido Ramirez
(NGO) ウイチャパン社会総合教育センター	センター長	Rogelio Sanchez Ramires
在メキシコ日本大使館	一等書記官	山田康博
JICA メキシコ事務所	所長	山口三郎
	次長	桜井英充
	調整員	仲間和男

#### 1-5 調査の方法

(1) 事前調査。過去の隊員報告書から問題、課題の抽出。

(2) 派遣中隊員に対するアンケート調査。

(3) 現地視察及び、関連隊員からの聴き取り調査。

(4) 現地施設側からの聞き取り調査。

(5) 要請案件先の訪問、聞き取り調査。

(6) JICA 研修員からの聴き取り調査。

(7) 調整員からの資料提供、聞き取り調査。

以上を総括し、今後の協力の方向性や効果的な派遣形態に対する提言を行う。

## 第2章 要約

### 2-1 コスタ・リカ

平成13年9月11日より同月14日までの4日間、予定通りの調査、訪問を実施した。協議、巡回指導、調査時の結果は以下の通りであった。

(1) 日本大使館表敬訪問並びに松井大使閣下、西山二等書記官との協議。

コスタ・リカ医療、福祉従事者を対象とした研修セミナーの開催が内諾された。セミナー開催に伴う日本からの講師派遣等については草の根無償資金による運営を検討、担当書記官が調査することとなった。

(2) 企画省における医療、福祉関係機関との協議

出席者：企画省、社会保険公庫、国家リハビリテーション審議会、教育省6名  
上述、日本大使館の研修セミナー開催に賛意を示し、開催に伴う諸機関との調整連絡及び実施について全面的な協力が確認された。

(3) 隊員派遣先訪問並びに同施設長からの聞き取り調査。 4件

各施設とも隊員に関する問題はなく組織並びに現場の質的レベルアップと職員の意識改革に寄与していると評価、一様に隊員の継続的要請が要望された。

(4) 派遣予定施設訪問

新規派遣予定施設であるアンドレア・ヒメネス養護学校を訪問、現地調査の結果、要請の妥当性について確認した。

(5) 新規案件先の調査

義肢装具士要請が出されている国立サン・ファン・デ・ディオス病院の現場視察と担当者との懇談により要請ニーズと妥当性が確認された。

(6) 来日研修員（理学療法士）からの聞き取り調査

ア) 12年前にJICA研修員として来日、10か月の研修を受けたことのあるアナ・K・テモリオさんと懇談の機会を得た。

イ) 現在、コスタ・リカ福祉政策立案に関しての提言者であり今年より各養護学校へ理学療法士2名の定員化が決定したことはアナさんによる進言であったことを本人より確認した。

ウ) グアダルーペの脳性マヒ総合療育センターにおいては隊員の最も良き理解者であり、協力者であることを大嶋みどり隊員（11/1・作業療法士）より報告を受けた。

(7) リハ・福祉分関連隊員との協議

- ア) コスタ・リカ赴任中のリハ・福祉分野関連隊員 5 名全員の施設と現場を巡回し、調査指導を行った。
- イ) 隊員との協議では、各隊員とも業務上の問題よりも隊員がいかに施設環境を理解し状況に応じて仕事を開拓していったかが素直に表現され、人間的成長が顕著にみられたのが印象的であった。

(8) 現地事務所との協議

- ア) 巡回訪問、調査日程の確認及び調査方法、方針の説明と、現地事務所からの聞き取り調査の実施。
- イ) 巡回指導訪問の結果報告。各施設における具体的な要請職種と派遣人数についての助言を提出した。
  - ①ロス・サントス老人ホーム (追加要請として) 介護福祉士  
理学療法士
  - ②社会保険公庫サン・ビト病院 (追加要請として) 理学療法士
  - ③国立サンファン・デ・ディオス病院 (新規要請として) 義肢装具士

(9) 隊員資料として次のビデオ教材を持参、提供した。(現地事務所にて保管)

- 「嚥下障害」
- 「摂食障害」
- 「高齢者の嚥下障害とリハビリテーション」
- 「ぼく食べられたよ」

2-2 メキシコ

平成13年9月16日より同年9月20日までの5日間、日程が1日短縮されたのに関わらず、予定通りの巡回指導、要請案件等の調査、訪問を実施した。協議、訪問時の要約は以下の通りであった。

(1) 事務打ち合わせ、日程の確認

仲間調整員との日程確認及びメキシコにおけるリハ・福祉概要説明を受けた。

(2) JICAメキシコ事務所にて協議

- ア) 山口所長、桜井次長よりメキシコにおける技術協力の現状について説明を受けた。
- イ) 全日程を終了後、報告を行い、今後の具体的な要請開拓と職種について報告書を提出した。

- (3) 在メキシコ日本大使館表敬訪問
- ア) 山田一等書記官との協議。
  - イ) 山田一等書記官は9月18日の神経開発専門センター、イダルゴ第4養護学校、第5養護学校の現地視察に同行された。
- (4) 隊員派遣先訪問並びに同施設長からの聞き取り調査 3件
- ア) メキシコにおけるリハ・福祉分野関連隊員の派遣数は現在5名であるが、国土が広く全施設を訪問することは日程的に不可能であり3件にとどまった。
  - イ) 各施設ともモノではなく人材要請を強く求めている姿勢が感じられた。
- (5) メキシコ外務省国際科学技術協力課訪問
- 同課長並びにJOCV担当官からの聞き取り調査。メキシコにおけるJOCVの活動評価を確認した。また、先住民教育の遅れや今後の取り組みの重要性について説明があった。
- (6) メキシコ総合教育サービス局訪問
- ア) 初等教育総責任者並びに重複障害者教育総責任者からの聞き取り調査。
  - イ) メキシコ州重複障害者受入支援校(以下CAM)24校においては人的資源が乏しく、養護隊員等派遣の強い要望があった。
- (7) 新規案件先の調査 8件
- ア) CAMを中心とした施設の踏査。CAMは障害児の普通校への転入を目標としており、とりわけ重度重複障害児の身体機能の改善、情操教育に新しい技法を求めている。
  - イ) 今回の巡回指導、要請案件調査終了に伴い各CAMからの問い合わせが多く、現地JICA事務所には既に45件の隊員派遣に係る要望が届いており、新規案件については慎重に調査を進めている旨の連絡があった。

## 第3章 コスタ・リカにおける調査

### 3-1 コスタ・リカにおける協力隊派遣概要

#### 3-1-1 コスタ・リカ全体としての協力隊派遣概要

コスタ・リカに対する協力隊派遣は1973年に開始し、中南米ではエル・サルヴァドルに続き二番目に開始された。派遣開始以来、これまでに328名の隊員を派遣してきた。

コスタ・リカは、政情、治安が比較的安定しており、軍隊を持たないことから、国防費の予算が教育部門の予算にあてられ（約25%）、この結果、初等教育が充実し、高等教育機関もレベルが高いという環境にある。

また、福祉部門に対する公的社会支出が対GDP比で20.8%と、ラテン・アメリカでは、ウルグアイ（22.5%）、パナマ（21.9%）に次いで高い比率にあり、一人あたりGDPはUS\$2900（1997年）と決して高い水準でないのにも関わらず、社会支出が高いことから、ラテンアメリカの福祉国家の代表としてしばしば言及される国である<sup>1</sup>。このことから、福祉部門への隊員支援は派遣当初から支援重点分野であった。

#### 3-1-2 コスタ・リカにおけるリハ・福祉分野派遣隊員概要

リハ・分野分野への隊員派遣は、理学療法士の最初の派遣である、1979年に開始し、派遣重点分野としてこれまでに21名の隊員が派遣された（表3参照）。現在、理学療法士、作業療法士、ソーシャルワーカー等同分野関連隊員5名が活動中であり、コスタ・リカにおける協力隊派遣の重点分野として着目される。

コスタ・リカにおける理学療法士の主な勤務先は国家リハビリテーション審議会、社会保険公庫病院、教育省下にある養護学校である。協力隊の派遣はこの3機関を網羅する形で行われてきた。隊員が活動を行うのに伴い、現地における理学療法士に対する理解が深まり、コスタ・リカ人理学療法士が増え始めたことから、1997年頃に派遣方針を従来の国家リハビリテーション審議会等の中央機関から、地域のニーズに密着した養護学校及び地方への派遣へと転換し、その後広がり展開をみせている。

コスタ・リカには、現在、理学療法士養成機関として、サンタ・パウロ大学（私立）があり、年々コスタ・リカ人の理学療法士の数は増えている。しかし、小児専門の理学療法士が少ない等専門領域が限られている。コスタ・リカには、全国に22カ所

<sup>1</sup>（宇佐見耕一「ラテンアメリカ福祉国家論序説、アジア経済研究所、P26）

の養護学校があるが、養護学校で勤務する理学療法士は全国で僅か6名と非常に少ないことから、教育省は理学療法士の待遇を改善しつつあり、今後は、各校2名の理学療法士を配置する予定である。作業療法士については、上記サンタ・パウラ大学に作業療法科が新設されたばかりであり、未だ卒業生を出していない。このため、現在勤務している作業療法士は海外で技術を修得した者に限られており、その数は問題にならないのが現状である。

(表3) 配属先別協力隊員派遣状況

配属先名	職種	隊員名	隊次	活動期間(自)	(至)
教育省カルロス・ルイス・ バジェ・マシス養護学校	理学療法士	安藤 恭子	92	19971208	19991207
	理学療法士	緒原 よし美	121	20000710	20020709
	理学療法士	13秋要請			
	ソーシャルワーカー	藤野 史奈	121	20000710	20020709
	ソーシャルワーカー	13秋要請			
教育省ネウロシキアトリカ養護学校	養護	浅野 利昭	91	19970714	20000113
教育省アンドレア・ヒメネス養護学校	作業療法士	長沢 裕子	133		
教育省リハビリテーション養護学校	作業療法士	大黒 一司	611	19860730	19880729
教育省脳性小児麻痺患者総合療育センター	理学療法士	中川 美智子	101	19980714	20001113
	作業療法士	大嶋 みどり	122	20001206	20021204
ロス・サントス老人ホーム協会	ソーシャルワーカー	上田 由美子	112	19991206	20011206
	作業療法士	草野 将	141		
国家リハビリテーション審議会	理学療法士	山崎 利幸	542	19791019	19811018
	理学療法士	大塚 ひろみ	542	19791019	19811018
	理学療法士	福田 敏幸	31	19910718	19930717
	理学療法士	辻本 佳代	51	19930716	19950930
	理学療法士	辻本 佳代	89	19970225	19980111
	作業療法士	野見山 直子	11	19890713	19910712
	作業療法士	瀬本 薫	23	19910405	19930404
	養護	美濃 育子	631	19880711	19900710
社会保険公庫サン・ビト病院	理学療法士	宮本 謙司	111	19990712	20010711
	理学療法士	別入田 吉み江	123	20010403	20030402
社会保険公庫サン・ラモン病院	理学療法士	野崎 靖弘	582	19831012	19851031
	理学療法士	谷沢 絹恵	591	19840725	19860724
	理学療法士	梶村 由美子	601	19850724	19870723

派遣中隊員

## 第3章 コスタ・リカにおける調査

### 3-1 コスタ・リカにおける協力隊派遣概要

#### 3-1-1 コスタ・リカ全体としての協力隊派遣概要

コスタ・リカに対する協力隊派遣は1973年に開始し、中南米ではエル・サルヴァドルに続き二番目に開始された。派遣開始以来、これまでに328名の隊員を派遣してきた。

コスタ・リカは、政情、治安が比較的安定しており、軍隊を持たないことから、国防費の予算が教育部門の予算にあてられ（約25%）、この結果、初等教育が充実し、高等教育機関もレベルが高いという環境にある。

また、福祉部門に対する公的社会支出が対GDP比で20.8%と、ラテン・アメリカでは、ウルグアイ（22.5%）、パナマ（21.9%）に次いで高い比率にあり、一人あたりGDPはUS\$2900（1997年）と決して高い水準でないのにも関わらず、社会支出が高いことから、ラテンアメリカの福祉国家の代表としてしばしば言及される国である<sup>1</sup>。このことから、福祉部門への隊員支援は派遣当初から支援重点分野であった。

#### 3-1-2 コスタ・リカにおけるリハ・福祉分野派遣隊員概要

リハ・分野分野への隊員派遣は、理学療法士の最初の派遣である、1979年に開始し、派遣重点分野としてこれまでに21名の隊員が派遣された（表3参照）。現在、理学療法士、作業療法士、ソーシャルワーカー等同分野関連隊員5名が活動中であり、コスタ・リカにおける協力隊派遣の重点分野として着目される。

コスタ・リカにおける理学療法士の主な勤務先は国家リハビリテーション審議会、社会保険公庫病院、教育省下にある養護学校である。協力隊の派遣はこの3機関を網羅する形で行われてきた。隊員が活動を行うのに伴い、現地における理学療法士に対する理解が深まり、コスタ・リカ人理学療法士が増え始めたことから、1997年頃に派遣方針を従来の国家リハビリテーション審議会等の中央機関から、地域のニーズに密着した養護学校及び地方への派遣へと転換し、その後広がり展開をみせている。

コスタ・リカには、現在、理学療法士養成機関として、サンタ・パウロ大学（私立）があり、年々コスタ・リカ人の理学療法士の数は増えている。しかし、小児専門の理学療法士が少ない等専門領域が限られている。コスタ・リカには、全国に22カ所

---

<sup>1</sup>（宇佐見耕一「ラテンアメリカ福祉国家論序説、アジア経済研究所、P26）

の養護学校があるが、養護学校で勤務する理学療法士は全国で僅か6名と非常に少ないことから、教育省は理学療法士の待遇を改善しつつあり、今後は、各校2名の理学療法士を配置する予定である。作業療法士については、上記サンタ・パウラ大学に作業療法科が新設されたばかりであり、未だ卒業生を出していない。このため、現在勤務している作業療法士は海外で技術を修得した者に限られており、その数は問題にならないのが現状である。

(表3) 配属先別協力隊員派遣状況

配属先名	職種	隊員名	隊次	活動期間(自)	(至)
教育省カルロス・ルイス・バジェ・マシス養護学校	理学療法士	安藤 恭子	92	19971208	19991207
	理学療法士	楢原 よし美	121	20000710	20020709
	理学療法士	13秋要請			
	ソーシャルワーカー	齋藤 史会	121	20000710	20020709
	ソーシャルワーカー	13秋要請			
教育省ネウロシキアトリカ養護学校	養護	浅野 利昭	91	19970714	20000113
教育省アンドレア・ヒメネス養護学校	作業療法士	長沢 裕子	133		
教育省リハビリテーション養護学校	作業療法士	大黒 一司	611	19860730	19880729
教育省脳性小児麻痺患者総合療育センター	理学療法士	中川 美智子	101	19980714	20001113
	作業療法士	大嶋 みどり	122	20001205	20021204
ロス・サントス老人ホーム協会	ソーシャルワーカー	上田 由美子	112	19991206	20011205
	作業療法士	草野 稔	141		
国家リハビリテーション審議会	理学療法士	山崎 利幸	542	19791019	19811018
	理学療法士	大塚 ひろみ	542	19791019	19811018
	理学療法士	福田 敏幸	31	19910718	19930717
	理学療法士	辻本 佳代	51	19930716	19950930
	理学療法士	辻本 佳代	89	19970225	19980111
	作業療法士	野見山 直子	11	19890713	19910712
	作業療法士	瀧本 薫	23	19910405	19930404
	養護	美濃 育子	631	19880711	19900710
社会保険公庫サン・ビト病院	理学療法士	宮本 謙司	111	19990712	20010711
	理学療法士	羽入田 きみ江	123	20010403	20030402
社会保険公庫サン・ラモン病院	理学療法士	野崎 靖弘	582	19831012	19851031
	理学療法士	谷沢 絹恵	591	19840725	19860724
	理学療法士	梶村 由美子	601	19850724	19870723

 派遣中隊員

### 3-2 リハ・福祉分野隊員の活動状況

#### 3-2-1 ロス・サントス老人ホーム

##### (1) 施設概要

サン・マルコス市にあるこの老人ホームは郡内出身の60歳以上の身よりのない老人、痴呆老人を対象とした終身介護施設である。市をはじめ国からの助成金、宝くじ等による寄付金により経営されている。利用者の平均年金は79.3歳（最高年齢96歳、最低年齢65歳）であり定床数は56床であったが、入所者増加に伴い現在68名が入所中である。占床率は常に定床数を越え、ベッドは流動的に運用されている。そのためベッド数が足りず草の根無償資金により購入補充された。

職員は総数15名である。実際の介護にあたる寮母は僅か2名であり、顧問医も存在せず、1名いる看護師が疾病発生時にカルタゴ市の病院まで連れ添っていき診療を受けるため看護師は殆ど不在である。

今夏は施設内で風邪が流行し、一度に6名の入所者が死亡するという状況も起こっている。当初の要請は「基本的な介護等は何とかが行われているが、大部分の時間は何もすることがなく、一日が過ぎるのをもてあましている環境にあり、老人達のストレスがたまっている」ことに対してであったが、基本的介護を行うには、絶対的な人手不足、介護技術不足がみられた。

##### (2) 隊員活動状況（上田由美子隊員・11/2・ソーシャルワーカー）

終身介護施設では、社会復帰や家に帰すというソーシャルワーク的な措置処置業務は見えず、赴任当初は落胆と挫折の連続であった。幸い介護福祉士の資格も有していたため、基本的介護の改善と日々の充実化に努めた。介護と生活指導、余暇の充実化に着目し、柔軟性のある実行力と対応能力を高く評価したい。

上田隊員の実践と効果は次の通りであった。

- ア) ベッドサイド周辺の移動動作指導（身辺自立に向けて）
- イ) 合併症の予防→床ずれが激減
- ウ) リクリエーション活動の導入→身体の活性化
- エ) 創作活動プログラムの導入→余暇の充実化
- オ) 毎日の沐浴実施→清潔の維持
- カ) 草の根無償資金申請による渡り廊下の設置→サンルームとしても多目的活用
- キ) 草の根無償資金協力により車椅子20台を補充
- ク) 草の根無償資金協力によりベッドを購入

以上のような活動の積み重ねによって、施設長をはじめ職員の老人に対する意識の変化、対応の変化が徐々にではあるがみられるようになった。

(3) 課題

- ア) 人手不足、人材不足
- イ) 乏しい運営資金
- ウ) 入所者の重度化現象
- エ) 入所者の身体機能評価と身辺自立を見極めるプログラムの欠如
- オ) 自立移動のための移動機器の未整備
- カ) 入所者の人生の質の維持のための配慮の欠如

(4) 次期派遣予定について（草野将隊員・14/1・作業療法士）

上田隊員の後任として、上記課題への取り組みが期待される。作業療法士という観点から入所老人の人生の質のあり方について具体的な働きかけと、施設の活性化が図れるよう期待したい。一方、理学療法士による集中的機能改善訓練によって、入所者の自立度が高まり、介助量が減少していけば、現状の人手不足の解消につながるであろう。この職種の追加要請も検討されてもよいと思われる。

ロス・サントス老人ホームにおける隊員活動を、出来れば3職種同時派遣（理学療法士、作業療法士、ソーシャルワーカー）を実施することによって、今後コスタ・リカでも増加するであろう身よりのない老人の対応モデルとなると思われる。

3-2-2 社会保険公庫サン・ビト病院

(1) 施設概要

コスタ・リカの公立病院は各主要都市に存在し、社会保険公庫により運営されている。コスタ・リカでは国民皆保険制度をとっており、医療費は手術を含め全額無料であり、一定の保険料を納入していない貧困者も申請すれば無料で診察を受けられる。サン・ビト病院は、パナマとの国境沿いにあるコト・ブルス郡の社会保険公庫病院である。同病院は、コト・ブルス郡の中心的存在であるが、CT スキャン等の精密な検査に必要な測定、検査機器がないことから、レントゲン撮影以外の精密検査は行えず、手術も簡単な外科手術以外は施行していない。同病院が管轄する僻地診療所（以下 EBASIS）が郡内に6カ所ある。

コト・ブルス郡の人口のうち10%が何らかの身体的障害を有しているといわれている。脳性マヒをはじめ、障害の種類や年齢も多岐にわたっている。コーヒ

一農園が多いところで、コーヒーの豆摘み労働者の腰痛、頸部痛、上肢痛など痛みを訴えてくる患者が多い。物理機器がないため、同時に複数の患者をみることができず、理学療法士によるマンツーマンの徒手療法が中心となっている。理学療法専門の建物が新設され、患者の予約は1ヶ月先まで一杯の状況である。

(2) 隊員活動状況 (羽入田きみ江隊員・12/3・理学療法士)

宮本謙司隊員 (11/1・理学療法士) の後任隊員として患者の理学療法を実施しているが、赴任間もないため前隊員から引き継いだ業務で手一杯である。新設された一軒家の理学療法棟で一人で過ごしていたが、最近、サンタ・パウラ大学理学療法学専攻の学生が2名臨床実習地として希望、日本から来ている隊員から新しい技術を学びたいとの由であった。臨床場面を中心に積極的な意見交換を進めるよう助言した。羽入田隊員は週2回、ここで一日平均5〜6名の患者に理学療法を実施、他の日はサンビト病院管轄のEBAISを拠点とした巡回訪問に従事している。

(3) 課題

ア) 医師とのコンタクトが殆どない。通常、医師からの依頼箋に基づいて理学療法は開始されるが、その依頼箋が殆どなく、あったとしても内容が意味をなしていない。係る経緯を踏まえ、療法実施に当たっては、必ずその内容とプログラム・ゴールについて医師に伝えることを隊員に強くコメントし、その様式サンプルを手渡した。依頼箋、又は処方箋の書ける医師に対して理学療法を理解してもらう方法を考える必要がある。

イ) カセットテープによる自主トレーニング、ホームプログラムの指導。急患は、2、3時間かけて来るケースが多い。しかも1ヶ月に1度の受診の機会しかないのでは、理学療法の効果も期待できない。来所時の待ち時間も長い。そのため、来所時は半日ほど、理学療法棟で自主トレーニングが実施できるようトレーニング内容をカセットで流し、遠位監視のもとに多くの患者をみれるよう提案した。トレーニングカセットについては、腰痛、頸痛等処方別のプログラムを技術顧問より提供したものを近日中に送付することにした。

(4) 今後の要請について

ア) 新設棟を訪ねてくる貧困層、農園労働者等の無料による理学療法実施は、週5日でも充分価値があり、喜ばれるものであり、隊員は常駐すべきである。

- イ) 一方、地方巡回訪問については、巡回訪問業務を主とする隊員を追加要請することによって、相互の業務は尚一層充実し効果をもたらすものと信ずる。

### 3-2-3 脳性小児麻痺患者総合教育センター

#### (1) 施設概要

1992年に教育省並びに保健省によって創立された養護学校であり、脳性マヒ児の療育、教育を包括した総合療育センターである。現在0歳から50歳まで200余名の障害児が療育、教育を受けている。収容施設はなく、母子共に通園している。JICA研修員として12年前に来日し、10ヶ月の研修を受けた理学療法士1名、言語療法士1名もおり、訓練、療育に必要な道具、機器は十分に整っている。また、養護教員も数名いるが、個別に適合する補装具などの作成に必要な材料とそれを作成できる装具士はいない。中川美智子隊員(10/1・理学療法士)が同病院で勤務した経緯がある。

#### (2) 隊員活動状況(大嶋みどり隊員・12/2・作業療法士)

これまで作業療法士がいなかったが、大嶋隊員によって作業療法が行われ、療育計画に一貫したプログラムが組み込まれるようになり、質的、技能的改善、変化をもたらしている。

隊員は、語学力不足によるコミュニケーションの欠如にストレスを感じているが、障害児に対する直接的な療育指導には何ら不自由はみられない。

しかし、業務の立案計画、スタッフ間のカンファランス、母親への説明時には、今少しもどかしく感じている。スタッフは隊員の作業療法士としての力量を認めており、何れ摂食障害に対するアプローチ、作業療法的手法を講義、デモンストレーションしてくれることを期待している。また、母親、障害児からの信頼も厚い。

校長は継続的隊員派遣に対し感謝していた。赴任して間もないため、施設内の状況を充分把握していない様子であったが、他の養護学校で隊員と一緒に働いた経験があり、協力隊派遣に対しては理解がある。

#### (3) 課題

首都サン・ホセにあり、コスタ・リカの脳性マヒ障害児療育センターとして中核的機能を担っている。理学療法士2名の定員化も決定していることから、中心的役割を担うモデル施設として自助努力を促していく時期にきていると思われる。

### 3-2-4 カルロス・ルイス・バジェシマス養護学校

#### (1) 施設概要

コスタ・リカ国全国22カ国に存在する心身障害児養護学校の一つである。同学校には安藤恭子隊員(9/3・理学療法士)が国家リハビリテーション審議会から配属先を変更し、活動したのが始まりであり、椿原よし美隊員は二代目である。C/Pの理学療法士は国立コスタ・リカ大学理学療法科(現在は無い)を卒業した10年以上のベテランであり、今年からコスタ・リカ人の理学療法士1名が増え、隊員を含めて理学療法士3名体制となった。

#### (2) 隊員活動状況(椿原よし美隊員・12/1・理学療法士)

同隊員は日本での理学療法経験が6年あることから、施設からもその確かな実力を評価されている。日本における小児指導経験は乏しかったが、基礎的知識があるため、スタッフの要望に応えることができている。具体的活動の方向性が定まりつつある状況である。送迎バスの老朽化、プールの管理、小児の評価方法において問題意識を感じている。ソーシャルワーカー隊員とのセット派遣であるところ、今後互いの活動による相乗効果をどのように高めていくのかが問題である。後任を平成13年度秋募集にて要請している。

#### (富樫史会隊員・12/1・ソーシャルワーカー)

ソーシャルワーカーとして新規要請され、赴任したが当初は校長もソーシャルワーカーの具体的業務が分からず、学校内の業務内容の把握、各関係部署の人間関係作りを進めた。現在は、ソーシャルワーカー本来の役割として、家庭の経済的問題解決に向けての援助を手がけ、個別相談、校内、家庭、地域内の調整連絡を行っている。

障害児及び両親が利用できる社会資源の調査並びに情報提供、卒業後の生徒に対して社会参加プログラムの情報収集と情報提供等を行っており、校長もソーシャルワークを理解し始めており、隊員の個々の接遇援助の実践力を高く評価している。後任継続の要請があり、平成13年度秋募集で要請している。

#### (3) 課題

(椿原よし美隊員)

ア) 養護学校に2名の理学療法士の定員化がいち早く当施設において実現したところである。

- イ) 隊員を含め総勢3名体制をとった施設であるが、通園時に均質な機能訓練指導を実現していくにはほど遠いにしても、定員枠で今後どのように対応していくかは、現地スタッフの課題である。
- ウ) 小児専門の理学療法士がまだ少ない現在、現隊員のような確かな技術をもった療法士による、特に母親に対する的確な療育プログラム、発育に応じた評価とプログラム変更等、現状より一段レベルの高い技術伝授は当分の間必要であろう。

(富樫史江隊員)

- ア) ソーシャルワーカーの存在しなかった施設で、隊員の努力で業務開拓が行われ、本来のソーシャルワーク的活動ができた。
- イ) しかし、社会資源が極めて少ない土壌の中で、障害児の社会参加、成人知的障害者の雇用先開拓とそのフォローアップを行っていくのは困難であり、継続的な活動が望まれる。
- ウ) 校内活動としては、奨学金受給の事務手続きの指導、助言などを行い、個人の経済状況を知ることによって、家庭の経済問題への個別アプローチが出来てくるだろう。
- エ) 教員をはじめ担当スタッフの知的障害の特性に対する理解度が低いことが具体的援助技法の進捗に影響しており、隊員による定期的なOJTの開催も検討されるべきであろう。

### 3-3 新規派遣要請の内容確認

#### (1) アンドレア・ヒメネス養護学校 (長沢裕子隊員・13/3・作業療法士) 派遣予定

教育省管轄の養護学校である。知的障害、身体障害、視覚障害者、聴覚障害者混成の軽度から重度まで約80名の通園施設である。成人障害者の作業所も併設されているが、作業所としての体制は整えられていない。

昨年、現地の新卒の理学療法士が配属され、未経験ながら子供好きの若い女性が障害児の機能訓練、親に対する療育指導に当たっている。作業療法室には無資格の指導員(養護教員)が1名おり、生活指導を担っている。必要な機器、道具については、ある程度整っているが、本来の作業療法プログラムは実施されていない。理学療法士同様、現地養成校を卒業した作業療法士の赴任が待たれるが、今いる障害児の生活指導と身辺自立に向けての作業療法の導入と技術移転は急務であり、成人障害者の作業所整備も含めて作業療法士の要請については、その妥当性について確認することができた。

## (2) 国立サン・ファン・デ・ディオス病院「義肢装具士」要請確認

コスタ・リカには、約30万人の身体障害者がいるといわれているが、これに知的障害、精神障害を含めると相当の数が予想される。義肢義足を必要とする四肢切断者の数は把握されていないが、コスタ・リカ特有の中高年の肥満と糖尿病合併症に伴う切断者の増加が容易に予測される場所であり、実態に応じた義肢装具作成部門の充実化が望まれる。

しかし、現実には、厚生省に隣接した国立サン・ファン・デ・ディオス病院内に国内で唯一の義肢装具制作部門があるのみである。ここでは、社会金融公庫の保険適用の範囲内で義肢装具作成の注文に対応しており、4名の職人が1ヶ月

12本前後の義肢、矯正靴等を作成している。国内には義肢装具士は僅か2名いるのみで、そのうちの1名がここに勤務している。向学心に燃え、常に新しい技術を求めているが、専門職の1人職場であること、工房の機械機具が全て30年以上も前のものであること、集塵装置がないことなど工房としての環境も劣悪である。真空成形装置のないこと、機器の老朽化などを考えると義肢装具制作部門が稼働しなくなるのはいずれ時間の問題であろう。

協力隊による義肢装具士の派遣は職場の活性化をはかり、また、四肢切断者にとって最適な義足を作成、支給できることは、この分野の発展に大きな効果と厚い評価をもたらすことになる。

### 3-4 リハ・福祉分野における問題点と課題

21年前の協力隊派遣当初に比べ隊員の協力活動の結果、コスタ・リカ人理学療法士が増え、理学療法士に対する理解も深まりつつある。とはいうものの、理学療法士の存在は全国で400名、うち、小児専門の施設に従事する理学療法士は僅かに6名という状況で、養護学校における人材不足に変わりはない。

しかし、サンタ・パウラ大学（私立4年制）に理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、呼吸療法士の養成コースが出来たこと、2001年より養護学校に療法士2名の定員化が認められたこと等により、今後養護学校における体制は整っていくと思われることから、漸次養護学校とは距離を離していく方がよい。

代わってコスタ・リカの平均寿命は男性78歳、女性74歳と高齢化社会に入っており、高齢に伴う疾病、合併症も増加し、病院では、早期退院を迫られ家族相互扶助の概念が強い国とはいえ、やむなく、老人ホーム施設を利用しなければならない老人も増加している。上田由美子隊員の任地、ロス・サントス老人ホームにおける入所待機者は把握出来ない状況で、福祉国家をめざすコスタ・リカの協力隊によ

る支援活動の方向が予測される場所である。

### 3-5 今後のリハ・福祉分野隊員派遣について

- (1) 今年より各養護学校へ2名の理学療法士の定員化が決定されたとはいえ、充足されるにはかなりの年月を要し、一方で障害児の発生率は依然として変化していない。日本の養護学校制度とは異なり、コスタ・リカでは養護学校が教育はもとより、総合的な療育施設としてリハビリテーションも総括しており、障害児に対する支援活動は今後共、養護学校を中心に継続されるべきであろう。
- (2) 養護学校の数は増加しており、現地の支援ニーズが強いのは、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士である。
- (3) 一方、日本国内の状況を見ると、上記に挙げた職種の協力隊応募者は少なく、選考の結果をみても充足率は30%前後である。しかし、理学療法士、作業療法士とも毎年4000名近くの卒業生が出てくると、国際協力に関心も高まりつつあることから、障害児施設に対する募集の偏り(約80%)から要請内容に国内事情に見合ったニーズ開拓が現地事務所求められる。
- (4) 適正人材確保のための日本国内における募集職種の見直しを検討。
  - ア) 新たな職種の設置として「介護福祉士」の募集を検討する時期にきている。
  - イ) 「義肢装具士」については、特殊技術のため、技術者が参加し難い状況となっている。組織募集により、応募者層が広がる可能性があるところ、組織募集について検討する必要がある。
- (5) 小児分野の要請に対しては技術補完研修の付加価値を設けるべきである。
- (6) リハ・福祉分野セミナーの実施。

コスタ・リカにおけるリハビリテーション分野では医師の認識と理解の低さが、その発展と普及を阻害している。また、福祉分野においては、福祉行政、施設長の認識が尚も低い。医師をはじめ関係機関を対象とした巡回型リハ・福祉分野のセミナーを開催し、関係者の認識を厚め、協力を得る必要がある。過去派遣した協力隊OB/OGをはじめ、我が国のリハビリテーション専門医等を講師として派遣し、リハ・福祉に対する理解を深め、現場でのチームワークが円滑に行われるように努力すべきである。

### (7) 医療協議会による施設長間意見交換会の実施。

協力隊員を派遣している各施設の施設長の職種並びに隊員業務に対しての理解が乏

しい面もあり、施設長間の意見交換、情報交換を通じ、互いの施設の状況を確認すると同時に、状況改善の必要性を認識してもらう必要がある。

## 第4章 メキシコにおける調査

### 4-1 メキシコにおける協力隊派遣概要

#### 4-1-1 メキシコにおけるリハ・福祉概要及び協力隊要請背景

メキシコの人口は約9800万人で、うち20%に相当する約2000万人がメキシコ・シティ及び周辺の衛星都市で生活している。統計上、メキシコの人口の約7%が身体障害者であるといわれ、メキシコ・シティ及び周辺都市における人口の約10% (200万人) が障害者人口とされている。200万人存在するとされる身体障害者のうちの7%に相当する僅か21万人しか教育を受ける機会が与えられていない現状がある。また、増え続ける出稼ぎ労働者及び同地で出生した児童、生徒に対応できない学校の受入体制が深刻化する中、急な予算増は難しく、学校運営、及び人員増が急務の課題となっている。

身障者教育への取り組みは歴史的に日が浅く、普通校の教師が重複障害者受入重複障害支援校 (以下CAM) に派遣される等課題が山積みされている。メキシコ教育開発事業計画 (1995年～2000年) では、医療・福祉教育と心身障害児教育開発が提唱され、初等教育、高等教育と並んで、就学前の幼児教育が開発課題に含まれている。表4はこれらに関連した組織をまとめたものである。

CAMは教師の増員に努力はしているが、同分野の実務経験を有する者が極めて少なく、また、家庭福祉庁 (以下DIF) においても、人材の配置が整わず、リハ・福祉分野における協力隊の要請は重要、かつ急務の課題となっている。

(表4) メキシコ 福祉・障害児教育部門

★USAER : Unidad de Servicios de Apoyo a la Educacion Regular 軽度な障害者を含む身障者受入普通校
★CAM : Centro de Atencion Multiple 重複障害者受入重複障害支援校 (普通校 (USAER) へ転入目標)
★CREE : Centro de Rehabilitacion de Educacion Especial 重複障害児教育及びリハビリ・センター (CAMとDIFが連携している)
★CAPEP : Centro de atencion Pre Escolar Psicopedagogico 就学前軽度心身障害幼児教育校 (軽度な心身障害者が対象)
★DIF : Desarrollo Integral Familiar 家庭福祉庁 (先住民・女性・貧困・弱者支援組織)
★SEIEM : Servicios Educativos Integral para Estado de Mexico メキシコ州統合教育サービス局 (連邦及び州教育省管轄下)

#### 4-1-2 メキシコ全体としての協力隊派遣概要

メキシコには1994年以來75名の隊員が派遣されてきた。当初派遣隊員数は概ね1隊次2-5名であり、派遣中隊員も20名弱で推移してきたが、一般的に中進国とされるメキシコにおいても草の根レベルの協力隊員による活動が有効であるとの認識は高まりつつある。それを受けて、平成12年度2次隊では10名、平成12年度3次隊で4名、平成13年度1次隊で8名の協力隊員を派遣し、また平成13年度2次隊では11名の派遣を予定するなど、メキシコにおける協力隊事業を今後積極的に強化する方針である。

また、広大な領土を有するメキシコに隊員を散在させてきた事を反省に、ベラクルス州を協力隊派遣のモデル州と位置づけ、試験的に同州に対し集中的な隊員派遣を行っている。その他にオアハカ州、イダルゴ州、ミチョアカン州を重点派遣州として位置づけている。

隊員派遣の分野については、保健医療分野、地域開発分野、環境分野であるが、現在派遣中隊員のうち約6割の隊員が保健医療分野（含むリハ・福祉分野）となっている。

#### 4-1-3 メキシコにおけるリハ・福祉分野派遣隊員概要

メキシコにおけるリハ・福祉分野隊員の派遣は平成11年度1次隊の養護隊員に始まったところであり、まだ歴史は浅い。（平成9年度3次隊手工芸隊員が配属先変更後、福祉センターで活動した例はある。）

しかしながら、同国においてリハビリ分野の要請は数多く上げられ、平成13年9月現在、養護隊員2名、言語聴覚士隊員3名、理学療法士隊員1名の計6名の隊員が同分野で活動しており、3名が今後派遣予定であり、平成13年度秋募集でも7件の要請があがっている。特に言語聴覚士の要請が多い。このように、リハビリ分野はメキシコにおいて重点分野の一つとなっている。

メキシコの障害児教育については、障害児も普通学校に共学することを理想としているが、個々に応じた指導が行われていないのが現状である。公的機関の支援が弱く民間の団体が障害児教育を担っている。殆どの民間団体が寄付金により運営されているものの、どこの施設も人件費まで予算をまわせず、人手不足が最大の問題となっている。

言語リハビリ分野においては、言語聴覚士を養成する専門学校が2年課程でレベルが低いこともあって、採用するところはほとんどなく、心理学を修めた養護教員がこれに当

たっている。病院など脳卒中後の失語症に対する言語療法的アプローチは殆ど実施されていない状況にあり、小児分野に比べ成人に対する言語療法システムのないことも問題である。

(表5) 配属先別協力隊員派遣状況

配属先	職種	隊員名	隊次	活動期間	(至)
ウィチャパン社会総合教育センター	養護	萩野 民子	111	19990715	20011214
	養護	辻 昇吾	132	20011200	20031200
	作業療法士	13年度秋募集			
	理学療法士	13年度秋募集			
脳性マヒ支援協会 (APAC)	理学療法士	福山 香里	131	20010709	20030709
神経開発専門センター	言語療法士	吉野 典子	121	20000713	20020712
	養護	村上 文	141	20020400	20040400
	理学療法士	13年度秋募集			
	言語聴覚士	13年度秋募集			
ピニャ・パルメラ児童福祉センター	手工芸	竹下 美奈子	93	19980409	20010108
	言語療法士	渡部 敦子	121	20000713	20020712
	果樹	朝倉 美之	122	20001207	20021206
	養護	水崎 留美子	122	20001207	20021206
	手工芸	桂田 恵子	131	20010709	20030709
	理学療法士	13年度秋募集			
ラ・ピエダデ市家庭福祉開発	言語療法士	伊藤 洋子	131	20010709	20030709
イルダッベレス・デル・ヴァーজে複合教育センター	理学療法士	中田 智子	132	20011200	20031200
	言語聴覚士	13年度秋募集			
メキシコ州総合教育サービス局CAPEP	言語聴覚士	13年度秋募集			

 派遣中隊員

#### 4-2 リハ・福祉分野隊員の活動状況

##### 4-2-1 脳性マヒ支援協会 (APAC)

###### (1) 施設概要

APACは31年前、障害児を持つ8人の母親の運動から始まったNGOである。現

#### 4-1-2 メキシコ全体としての協力隊派遣概要

メキシコには1994年以來75名の隊員が派遣されてきた。当初派遣隊員数は概ね1隊次2-5名であり、派遣中隊員も20名弱で推移してきたが、一般的に中進国とされるメキシコにおいても草の根レベルの協力隊員による活動が有効であるとの認識は高まりつつある。それを受けて、平成12年度2次隊では10名、平成12年度3次隊で4名、平成13年度1次隊で8名の協力隊員を派遣し、また平成13年度2次隊では11名の派遣を予定するなど、メキシコにおける協力隊事業を今後積極的に強化する方針である。

また、広大な領土を有するメキシコに隊員を散在させてきた事を反省に、ベラクルス州を協力隊派遣のモデル州と位置づけ、試験的に同州に対し集中的な隊員派遣を行っている。その他にオアハカ州、イダルゴ州、ミチョアカン州を重点派遣州として位置づけている。

隊員派遣の分野については、保健医療分野、地域開発分野、環境分野であるが、現在派遣中隊員のうち約6割の隊員が保健医療分野（含むリハ・福祉分野）となっている。

#### 4-1-3 メキシコにおけるリハ・福祉分野派遣隊員概要

メキシコにおけるリハ・福祉分野隊員の派遣は平成11年度1次隊の養護隊員に始まったところであり、まだ歴史は浅い。（平成9年度3次隊手工芸隊員が配属先変更後、福祉センターで活動した例はある。）

しかしながら、同国においてリハビリ分野の要請は数多く上げられ、平成13年9月現在、養護隊員2名、言語聴覚士隊員3名、理学療法士隊員1名の計6名の隊員が同分野で活動しており、3名が今後派遣予定であり、平成13年度秋募集でも7件の要請があがっている。特に言語聴覚士の要請が多い。このように、リハビリ分野はメキシコにおいて重点分野の一つとなっている。

メキシコの障害児教育については、障害児も普通学校に共学することを理想としているが、個々に応じた指導が行われていないのが現状である。公的機関の支援が弱く民間の団体が障害児教育を担っている。殆どの民間団体が寄付金により運営されているものの、どこの施設も人件費まで予算をまわせず、人手不足が最大の問題となっている。

言語リハビリ分野においては、言語聴覚士を養成する専門学校が2年課程でレベルが低いこともあって、採用するところはほとんどなく、心理学を修めた養護教員がこれに当

たっている。病院など脳卒中後の失語症に対する言語療法的アプローチは殆ど実施されていない状況にあり、小児分野に比べ成人に対する言語療法システムのないことも問題である。

(表5) 配属先別協力隊員派遣状況

配属先	職種	隊員名	隊次	活動期間	(至)
ウィチャパン社会総合教育センター	養護	荻野 民子	111	19990715	20011214
	養護	辻 昇吾	132	20011200	20031200
	作業療法士	13年度秋募集			
	理学療法士	13年度秋募集			
脳性マヒ支援協会 (APAC)	理学療法士	福山 香里	131	20010709	20030709
神経開発専門センター	言語療法士	吉野 典子	121	20000713	20020712
	養護	村上 文	141	20020400	20040400
	理学療法士	13年度秋募集			
	言語聴覚士	13年度秋募集			
ピニャ・パルメラ児童福祉センター	手工芸	竹下 美奈子	93	19980409	20010108
	言語療法士	渡部 敬子	121	20000713	20020712
	果樹	朗倉 英之	122	20001207	20021206
	養護	永縄 留美子	122	20001207	20021206
	手工芸	桂田 恵子	131	20010709	20030709
	理学療法士	13年度秋募集			
ラ・ピエダデ市家庭福祉開発	言語療法士	伊藤 淳子	131	20010709	20030709
イルダヤベレス・デル・ヴァージェ複合教育センター	理学療法士	中田 智子	132	20011200	20031200
	言語聴覚士	13年度秋募集			
メキシコ州総合教育サービス局CAPEP	言語聴覚士	13年度秋募集			

 派遣中隊員

#### 4-2 リハ・福祉分野隊員の活動状況

##### 4-2-1 脳性マヒ支援協会 (APAC)

###### (1) 施設概要

APAC は 31 年前、障害児を持つ 8 人の母親の運動から始まった NGO である。現

在では、メキシコ全土に70カ所の支部を持ち、障害児を持つ母親への療育指導を活動の中心に据え、社会参加を促し、地域で働くことに努力し職場提供もしており、貧困層を対象に全土で5000人の障害者を受け付けている。運営資金の90%は寄付金による。乳幼児に対する医療リハ部門、成人障害者の職業訓練を強化しており、現状では、寄付金による収入の獲得に一層の努力を必要としている。

### (2) 隊員活動状況(福山香里隊員・13/1・理学療法士)

NGO 団体であるが、メキシコ市のほぼ中心にあり、全メキシコ心身障害児療育センター的存在である障害児部門で理学療法に従事している。赴任してまだ日が浅く、市街の一地区に隣接して立ち並ぶ APAC の各部門も十分に把握できていない。障害児理学療法部門には1名の理学療法士と助手がおり、週間スケジュールにそってプログラムを消化している。同じ障害程度のグループ別による母親の療育指導は見事であり、かつて、オランダ、ドイツのボランティア理学療法士により、療育法が定着した。一方で障害児の評価が未確立で、この分野における整備を、福山隊員が個別に実施している。結果の伝達をはじめ発達経過に沿った母親への具体的な療育指導が期待されている。

### (3) 課題

メキシコ・シティの中心にある APAC は都会にあることもあって理学療法士をはじめ、作業療法士などの現地採用の可能性は高い。一方で地方にある70カ所の支部ではスタッフ要員の不足は著しく、地域格差是正の方向性からも地域支部がある程度体制の整っているところを地域モデルのひとつとして選択し、隊員の複数隊員によるセット派遣が検討されるべきである。障害児の身体的機能改善の効果は、上肢だけの機能に目を向けるべきではなく、下肢の移動動作も自立には必須であり、必要の度合いによって理学療法士、言語聴覚士、養護教諭などのセット派遣は必要であろう。現在のところ、サカテカス州 APAC において理学療法士の要請が出されているのみの状況である。メキシコ・シティにある APAC では、福祉機器の開発に取り組もうとしているが、福祉機器製作部門のスタッフ達はカタログしかみたことがないことから、将来的に同分野に関心のある隊員の派遣を行うことにより確かな技術移転が行える。

また、メキシコ・シティの APAC は都市にあるため、戸外に運動が出来る場所をもっていない。そのために、毎日通所してきても、軽度の知的障害者、身体障害者は、体を持て余している。幼児層への理学療法、作業療法にはかなり質の高い指導が提供されているが、移動の自立している青少年達の指導には手がまわっていない。運動プログラムによる身体の活性化を図る上にもスポーツ指導が検討されても良い。

#### 4-2-2 社会開発省神経開発専門センター

##### (1) 施設概要

イダルゴ州にあるこのセンターは、社会開発省による貧困の軽減、地域の活性化に貢献する事業への資金的援助のひとつとして 1982 年に設立された障害児通園施設の NGO である。しかし、僅かな給料しか支給されていないため、施設運営にも困難を来し、施設利用者 35 名の障害児の父母会後援会長をはじめ、ソーシャルワーカーなどの寄付金集めの努力により、何とか施設が運営出来ている状況である。新校舎を建設中であったが、資金不足により、中断していたところ、吉野典子隊員からの草の根無償資金協力の申請が出され、新校舎が間もなく完成することとなっている。

##### (2) 隊員活動状況 (吉野典子隊員・12/1・言語聴覚士)

隊員によれば、資金さえあれば現地の言語聴覚士を採用できるところだが「必要とされている私」の意識は強い。カウンターパートを最も信頼しており、これまで実施できなかった言語の早期刺激療法を行い、親の子供への見方、接し方などを指導、言語発達に著しい効果を上げている。任期 1 年で直接指導の実際を示し、後半の 1 年でカウンターパートを中心に言語訓練が出来るものを育てていく方向で業務を進めている。

言語療法を受けに来る障害児と親の通園率も高く、中には念願かなってやっとメキシコ・シティに仕事が見つかった家族が、シティでは隊員のようにすばらしい言語訓練をしてくれるところはないだろうと、仕事を棒にふったエピソードもあり、通園児童が総数 30 名程度と小規模な施設と勤勉な職員達に恵まれ「2 年間本当にしんどかった」といえるような働きをしたいと隊員は述べている。

14年度1次隊で養護隊員を派遣予定。また、平成13年度秋募集にて理学療法士、言語聴覚士の要請が出されている。

### (3) 課題

NGOを取り巻く環境は厳しく、この施設も例外ではないが、父母会後援会長の手腕によるところが大きく、ここまで発展してきている。同配属先は、メキシコで初めての言語聴覚士の隊員が活動したところである。言語聴覚士の派遣は1994年の中国から始まり、これまでに全世界で計7名しか派遣されていないが、うち半数にあたる3名がメキシコに派遣されている。草の根無償資金による後押しもあってイダルゴ州にリハビリテーションの拠点ができたともいえる。

今後とも言語療法を中心に作業療法士、理学療法士、養護によるプロジェクト的な土台作りを行い、リハビリテーション職種の現地採用に向けての布石を投じるべきであろう。

#### 4-2-3 ウィチャパン社会総合教育センター

##### (1) 施設概要

隊員を含めた3名の指導者で総勢30名の障害児・者(2歳~成人)の指導にあたっている。視覚障害者であるセンター長とその妻により運営されているNGOであるが、近くのDIFウィチャパン支所に吸収される予定である。小さなハートプロジェクトにより電気が来るようになり、水洗便所のための貯水タンクも据え付けられた。草の根無償資金協力により、施設の空き地に体育館が建設される運びとなっている

##### (2) 隊員活動状況(荻野民子隊員・11/1・養護)

同隊員は人手不足のため週2日この施設で障害児の指導に当たっている。他の日は、町の中心地域の洋裁教室で女性のための洋裁指導や障害児宅への訪問指導を精力的に行っている。資金集めと、社会自立の一助のため父母会が開設した手工芸品店の支援を行っている。

荻野隊員のウィチャパン地区における広範囲な活動は住民の知るところとなり、地域住民参加型のCBRの土台作りが始まったといえよう。後任継続の強い要望があり、13/2で辻昇吾隊員(養護)の派遣が決定している。また、平成13年度秋募集で作

業療法士、理学療法士の要請が出されている。

(3) 課題

ウイチャパン社会総合教育センターは町の中心にあるウイチャパン支所のリハビリテーション診療所に吸収されることになっている。施設はこれまで同様、視覚障害をもつセンター長によって運営、管理されるが、公的機関への吸収によってこれまで NGO として培ってきた努力が無視されることに強い憂慮を抱いている。同配属先からは、養護隊員の派遣要請に加えて、新設される体育館における障害児のリハビリテーションに対する支援の要請があり、一方、ウイチャパン支所においても診療所におけるリハビリテーションが要請されている状況で、双方とも理学療法士隊員の派遣を強く求めている。要請を受理する条件として、理学療法士隊員申請に際しては2施設における業務を兼務とするようコメントした。

4-3 リハ・福祉分野における問題点と課題

- (1) メキシコの広大な国土における地方格差は大きく、教育分野、とりわけ障害児教育においても例外でない。
- (2) 普通校編入をひとつの目標としている CAM の活動と相まって、教師をはじめ障害児を持つ親を含め社会全体が療育の質の向上に関心を向けている。要請されている職種や、要望内容は具体的であり、青年海外協力隊をはじめとする様々な支援組織に対する期待は、人的支援に集中している。
- (3) メキシコの広大な国土を考慮すると、協力隊員をメキシコ全土に平面的に拡散し派遣することは効果を上げにくい。リハ・福祉関連の複数職種同時派遣（セット派遣）をコアとし、組織的に整備されている障害児受入校に拠点を設け、サテライト・システムで均質な巡回指導型活動を展開すべきと思われる。

4-4 今後のリハ・福祉分野隊員派遣について

- (1) CAM は普通校（USAER）への転入を目標としているが、教師の人材不足、機能回復訓練指導の欠如により、期待されるような転入率をあげられず効果が上がっていない。

- (2) メキシコ州トルーカにある 11 の CAM は協力隊派遣要請の準備を進めている。メキシコ州では 24 の CAM が隊員要請の準備を進めている。イダルゴ州では 24 の CAM と 4 カ所の DIF が隊員派遣要請の準備を進めている。
- (3) 60 件近くもの隊員派遣要請が出されたとしても、何を以て隊員派遣の基準とするのか考える必要がある。今回の調査では、イダルゴ州 CAM 第 4 号校、第 5 号校、並びに、メキシコ州 CAM 第 17 校、第 20 校、CAM/DIF 連携校、及び CAM-Valle Bravo 校の CAM 関連施設を 6 カ所視察することができた。
- (4) 何れの施設も人的資源に乏しく、養護隊員をはじめ理学療法士、言語療法士等の強い派遣要望があった。施設環境をみると、どの CAM もある程度教材も整備されており、教育環境に深刻な問題もなく、どの CAM の施設長からも物品、設備改善の要望は出されなかった。共通した要望は人的資源の不足であり、とりわけ教育技術、療育技術をもった人材支援を強く求めており、技術移転を受け、少しでも普通校編入の可能性を探ろうとする姿勢が感じられた。
- (5) 協力隊派遣要請が出されるままに 5, 60 件もの派遣要請に答えるわけにいかない。イダルゴ州、メキシコ州にある CAM の一施設を選択し、そこを拠点として理学療法士、言語聴覚士、養護 3 職種のセット派遣を行い、メキシコ人養護教員への巡回型指導を進めていくべきである。そのことにより、各 CAM とも人材不足を補うマンパワーとして隊員を求める傾向は起こらないし、CAM 各校が隊員による技術移転を競合しながら導入していくための努力をすることによって、重度重複障害児の普通校編入が実現すれば隊員派遣の効果と評価は高いものとなる。
- (6) イダルゴ州では CAM 第 4 号校または第 5 号校がその拠点として適所と思われる。メキシコ州では、特殊教育研修所が附設している CAM-Valle Bravo が配属先として適所と思われる。同組織には、巡回指導する際の養護カウンターパートとして適任の要員もそろっており、隊員派遣時には即戦力として、巡回型の活動によって各校の反応効果を把握することが可能であろう。

## 第5章 まとめ

### 5-1 コスタ・リカ

- (1) リハ・福祉隊員の活動状況を視察、巡回指導を行った。見えない仕事から現場のニーズに合った業務を開拓し、効果をあげている姿が印象的であった。
- (2) 過去、22年間の経過の中で要請は政府中央機関におけるリハビリテーション医療への協力から、障害児者を対象とする養護学校、地域巡回訪問、地方病院、老人施設への協力と推移している。
- (3) 中南米の福祉国家を目指すコスタ・リカは、高齢化社会を迎えており高齢者の社会保障をはじめ介護が問題となる。今後の協力の方向性として、福祉分野の重要な着目点である。
- (4) 国内外において時代に応じた適正人材確保のための対応策を講じる必要がある。
  - ア) 的確な職種の募集
  - イ) 新しい職種の開拓「介護福祉士」「医療スポーツ指導員」「リハビリテーション・福祉機器」等
  - ウ) 理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等、充足率の低い職種については技術補完研修の機会を広める。
  - エ) 「義肢装具士」については継続的に要請されているものの、合格者が殆どいないことから、組織募集の可能性を検討する。

### 5-2 メキシコ

- (1) リハ・福祉分野の協力隊派遣要請は平成11年に開始されて間がなく、これまで僅か6名の隊員が赴任したにも関わらず、活動の波及効果には目覚ましいものがある。
- (2) 現地の人々は福祉開発には何よりもヒトが重要であることを認識しており、好感が持て、隊員を高く評価し期待も大きい。
- (3) 広大な国土に隊員を拡散して派遣するのは効率的ではない。
  - ア) 障害児を普通校に編入させることを当面のゴールとしている養護学校に、巡回型隊員のセット派遣を行う。
  - イ) リハを受ける機会の少ない地方の障害児を支援するNGOを支援することにより、福祉の底上げに協力する。
  - ウ) リハ医療従事者不在の地方医療機関には理学療法士の配属を優先させる。

(表6) リハ・福祉分野における特徴と課題

	コスタ・リカ	メキシコ
経緯	21年間続く支援協力 協力隊の理解度↑ 中央医療機関→養護学校 専門大学の新設 理学療法士の定員化(養護学校)	リハ・福祉隊員派遣2年目 協力隊の理解度↑ 民間施設→政府機関 専門職種の人材欠如 養成校は皆無
ニーズ推移	地方基幹病院、診療所 医療機関からの地方巡回型 老人ホーム施設 義肢装具工房	養護学校(CAM) 地方医療機関(DIF) 民間組織
今後の課題	リハ福祉分野セミナーの実施 (医師をはじめ職種別セミナーの開催) 医療協議会による施設長間意見交換会 適正人材確保のための募集職種見直し 組織募集の説明と理解 技術補完研修の付記	セット派遣(巡回指導型)
要請案件検討	介護福祉士 義肢装具士 理学療法士 作業療法士 養護教諭(養護指導員)	理学療法士 言語聴覚士 養護教諭(養護教員・指導員) 作業療法士

## 別添

- 1 議事録
- 2 メキシコ州トルーカ市 CAM 配置図



(別添 1-1)

議事録 1

日付 : 平成 13 年 9 月 11 日

訪問機関 : 在コスタ・リカ日本大使館

面談者 : 松井靖夫特命全権大使  
西山慎二等書記官

参加者 : 錦織祐子調整員、田口順子団長、阪本真由美団員

議事内容 :

- 1 団長より調査目的の説明。錦織調整員よりコスタ・リカ隊員活動状況の説明。
- 2 松井大使閣下より、リハ・福祉分野に係るコスタ・リカ人の理解を深めると同時に、今後のコスタ・リカにおける同分野の重要性を認識させるためのセミナー開催についての提案。
- 3 同セミナー参加対象者は医師、福祉・リハ分野関連者等。企画省との連携のうえ実施。隊員 OB/OG や日本のリハビリテーション認定医参加のもと実施する。講師派遣予算は、草の根無償資金協力にて対応可。隊員 OB/OG 派遣については、バック・アップ・プログラムにて対応可。同セミナーには、近隣諸国のリハ・福祉関係者も呼び、コスタ・リカを中米におけるリハ・福祉支援の拠点とすることも考えられる。

議事録2

日付 : 平成13年9月11日

訪問機関: コスタ・リカ企画省

面談者 : Ejerico Porras(企画省国際部門部長)

Mario Vindas (企画省協力部門調整員)

Barbara Holst (国家リハビリテーション審議会長官)

Lady Melendez (教育省特種教育部門顧問)

参加者 : 綿引純男調整員、田口順子団長、阪本真由美団員

議事内容:

- 1 ホルスト国家リハ審議会長官より、隊員が派遣された当初に比べると協力隊員の活動結果コスタリカ人理学療法士が増え、理学療法士に対する理解も深まりつつある。過去に比べ協力隊理学療法士派遣要請が減っているのはその成果といえる。それに比べ、作業療法士は依然人手不足であり、隊員派遣を希望している状況である。現在サンタ・パウラ大学(私立)やコスタ・リカ大学の中に理学療法士養成コースができています。
- 2 メレンデス教育省特殊教育顧問より、小児分野における人手不足は依然として問題であり、子供のための特殊教育センターを作ろうとしている。国内には22の特殊学校があり、リハ審議会も5診療所のほか2002年から25の関連プログラムを実施の予定である。また、ホルスト長官は、小児に対する理学療法の必要性を辻本隊員(5/1・理学療法士)の活動から実感しており、以来小児に対する理学療法の拡充に取り組んでいる旨付け加えた。
- 3 医師のリハビリテーションに対する理解が低い。社会保険公庫の理解が得られず、医療過程に理学療法を取り入れるのが非常に難しい状況である。
- 4 係る現状を踏まえたくうえで、コスタ・リカにおけるリハ・福祉分野関連職種の理解を深めると同時に、医師にリハビリテーションの理解を深めるためにも、医療・福祉関連者を対象としたセミナーを開催するのが良いと思われる。同セミナー開催にあたっての、業務調整は、企画省をはじめとする関連省庁間で行ってほしい。
- 5 同セミナーを是非実現させたいと考える。開催については、現在構想段階にある上記特殊教育センターの設立を機会として利用できないか、もしくは、他にどの時期が適切か考えたい。
- 6 団長より、日本は最近少子化が進んでいるものの、経験豊富な理学療法士が多くいることから小児分野に対する協力は可能である。一方、日本でも高齢化が進んでおり、コスタ・リカも同様の状況にあることから係る分野の支援も重要と考えている。今後は、コスタ・

リカにおいては、障害者の自立と社会進出のための支援が重要であろう。これらの支援については、日本における経験を是非コスタ・リカにも生かしてほしいと考える。

議事録 3

日付 : 平成 13 年 9 月 14 日

場所 : JICA コスタ・リカ事務所

参加者 : 上田由美子隊員、富樫史会隊員、椿原よし美隊員、大嶋みどり隊員、  
羽入田きみ江隊員、錦織祐子調整員、田口順子団長、阪本真由美団員

議題 : 医療福祉隊員部会との協議

議事内容:

- 1 団長より個々の隊員活動についてのコメント。
- 2 上田隊員について、老人も人間なのだとことを認識させたことの業績は大きい。一人ひとりの老人の生活の質の向上のための協力を望む。部屋の色を自分の好きな色にしたり、絵を描かせ額に入れて飾ってあげたり、視的空間作りをするとよい。他に音楽、箱庭、ハーブ栽培等活動はいろいろ考えられる。同施設に一番必要なのは企画調整、ライフプランナーの仕事。ケアマネージャー、介護福祉士、理学療法士等とのセット派遣が望ましい。
- 3 羽入田隊員について、カウンターパートもなく、活動を評価してくれる人もいない。自己管理能力が問われる。レントゲン持参の患者はいるも撮影方法自体に問題がみられ、放射線技師の技術不足を感じる。JICA 研修員コースにあるので、申請してみてもどうか。実習中の 2 名の学生とは治療技術、知識の共有を。一緒に治療にあたるとよい。時には、患者の評価の仕方、カルテの書き方等やらせてみるとよい。ホームプログラムの指導については、ポスター掲示等をし、リハビリセンターとしての視覚的な環境作りをするとよい。待ち時間に患者自らがポスターで学べる。治療に当たる時も、ポスターを指し示しながらこのようにやればという指導ができる。また、クリニカル・リハビリテーション・プロセス・ノートを作成し、毎回当該患者の担当医に提出してはどうか。理学療法についての理解促進が図れ、医師に対するデモンストレーションにもなりうる。ただし、見返りは期待しないこと。それでも毎回出し続ける。ここにはもう一人隊員を入れてはどうか。リハビリセンター専属と巡回専門の隊員の 2 名体制になれば、リハ効果も高まるし、リハの普及にもつながる。
- 4 大嶋隊員について、校長の大嶋隊員に対する認識評価は高い。今までどおり遠慮なくやってほしい。環境には恵まれている。学校として、積極的に学生の実習校として受け入れて欲しい。
- 5 椿原隊員、富樫隊員について、障害者の社会参加のための市場開拓が未開拓。能力開発センターのようなところがあれば、その人のもっている能力を評価し、何ができるのかを把握することで、どのような職業に就くことが可能かを検討できる。校長は 2 人の活動を評

価している。

- 6 調査総括として、隊員活動は非常に良い。日本との相性も良い国と思われる。平均寿命が77歳に達し、これから必ずや高齢者ケアに関する問題が出てくるものと容易に予想できる。教育や環境に力を入れているというが、福祉国家を目指してもよいのでは。【中米のデンマークに】。公的社会支出は19%で、中南米ではアルゼンチン、パナマに次いで3位という実績もある。
- 7 JICA/JOCVとしては、福祉水準のレベルアップのための協力をしていくべきであろう。
  - ア) 積極要請開拓（セット派遣等）
  - イ) 小児分野の継続協力
  - ウ) 老人リハ
  - エ) 医療従事者への理解促進セミナー開催（対象者別、職種別等）
  - オ) 隊員配属先への実習生受入

その他 医師に対し、リハビリテーションの重要性を認識させるための、セミナーの開催を提案した。また、隊員配属先機関長の会合（半年に1度程度）の開催についても提案した。



おわりに

今般の調査は米国同時多発テロの最中の出発となり、コスタ・リカでは JICA コスタ・リカ事務所の大峯保広所長をはじめ、綿引純男調整員、錦織祐子調整員にご心配をおかけし、大変お世話になりました。錦織調整員には滞在中、全日程に同行いただき、多くの情報と助言を頂きました。

また、在コスタ・リカ日本大使館では、お忙しい中にも関わらず、松井靖夫大使閣下をはじめ西山慎二等書記官と長時間にわたって親しく協議させて頂くことができました。報告書の中にもありますように、リハ・福祉分野の今後の展開に具体的なお助言を得ることができました。

メキシコでは、JICA メキシコ事務所の山口三郎所長、桜井英充次長には、広大な国土を巡回する過密な行程に体調をご心配いただきました。

また、在メキシコ日本大使館の山田康博一等書記官には、神経開発専門センター及びCAM 第4校及び第5校の視察に1日ご同行いただきました。

メキシコでは米国同時多発テロの影響で帰国日程が一日短縮されたにもかかわらず、仲間和男調整員のエネルギッシュな交渉とフットワークによって、当初に予定された日程を消化することができました。また、福祉関係の資料を準備頂き大変有益でした。

これら皆様方のお陰で、ここに調査行程を無事終了することができたことに心より御礼申し上げます。

平成13年9月

調査団長

田口 順子

JICA

J  
LIB